
遠距離女としつこい男

シュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠距離女としつこい男

【Nコード】

N7054Y

【作者名】

シユウ

【あらすじ】

遠距離恋愛中の女子高生につきまとうしつこい男子高生の恋愛物語。女の子目線で話が進んでいきます。ちよっと変わったタイプ(?)の現代恋愛物語です。毎日更新していく予定でお届けします。

あなたが好きです

「好きです！愛してます！俺と付き合ってください！！」

「断る」

「なんで!？」

「・・・何回フラれたら気が済むの？」

「君がOKを出してくれるまでさ!」

はぁ・・・ウザイ。

何回告白を断ってもすぐに立ち直って告白してくる。

こいつアルツハイマーかなんかなの？

「何回告白しても一緒よ。私には付き合ってる人が居るんだから諦めてちょうだい」

「しかしそいつとはもう半年以上も会ってないんだろ？だったら俺にもまだチャンスはあるっ!」

いやいや、堂々と「俺と浮気してください」宣言されても困るし。

私には心に決めた人がいるのだ。

今は遠距離恋愛だから会えないだけで、心の底から愛していると言える。

多分向こうもそう思っているはずだ。

「もうチャンスなんて無いから。何回告白しても結果は同じだから。私の考えは変わらないから。私用事あるから。バイバイ」

しっかりと言い切って後ろを振り向く。

背後で何か言っているが、気にしないで歩く。

こいつが私につきまとい始めたのは、三週間前のテストのあとの学校帰りだ。

友達と別れて一人で歩いていた時。

「キミが吉野君子「よしののけいこ」さん？」

「え？はい。そうですけど・・・どちら様ですか？」

「俺の名前は長谷川隆夫「はせがわたかお」。良かったら俺と付き合ってくれないか？」
「・・・は？」

これが最初の告白だった。

私には遠距離恋愛している彼氏がいたので、申し訳ないと思いつつも丁重にお断りした。

しかしこれから毎日毎日学校帰りで一人になったところを告白され続けた。

最初の1週間は告白されたのも初めてだったので、断るのにも少し罪悪感を感じていたけど、こうも毎日告白されては断るのを続けていると罪悪感も何も感じなくなってきた。

毎回同じ場所で告白されるもんだから、2週間目は違う道を通ってみただけやっぱりダメだった。

まるでストーカーのように私がいる道だけを選んで待ち伏せしている。

これはもう訴えたら勝てるレベル。

もしかしたらからだのどこかに発信機でも取り付けられているのかもしれない。

そして現在の3週間目。

もう違う道を通るのを諦めていつもの道を通り、相手の精神をブツ壊すために全力で断り続けている。

しかしあいつの精神力は底なしか？

何度断っても断っても学習していないかのようにつきまといってくる。

もしかして機械で出来ていて、学習するAIを搭載し忘れたのだろうか？

それなら納得がいくが、そんな近未来の話がある訳がない。私はリアリストだからそんな話は信じたくもない。

「あ。忘れてた。メールしないと」

メールの相手はもちろん遠距離恋愛中の加藤正樹^{かとうまほろ}。

同い年の17才で事情があつて大阪へ転校してしまったのだ。

当時付き合つていた私と正樹は互いに別れるつもりはなくて、大人になつたら会う約束をして遠距離恋愛を続けている。

メールや時々する電話だけが私たちをつないでいるけれど、私達の気持ちはいつも目に見えない何かでつながっていると信じている。

きっと正樹も同じことを思っているはずだ。

そう思いながら私は正樹へメールを送った。

あなたが好きです（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前の作品から読んでいただいている方は、いつもありがとうございます。

この作品から読んでいただいている方は、よろしくお願い致します。

なんやかんやでまた恋愛小説に落ち着きましたが、これからも拙い文章ですがよろしくお願い致します。

では次回もお楽しみに！

私と正樹

私、吉野君子と加藤正樹が出会ったのは高1の2月。

あまり友好の輪を広げない私の、唯一と言ってもいいこの学校での友達の照井明子ていあきこが風邪で休んだ日のことだった。

明子以外に話す相手があまりいない私は授業と授業の間の休み時間中は、窓側の真ん中の席でボケーっと外を眺めていた。

朝、明子にメールを試してみただけで寝ているのか、未だに返信はない。病気は寝て治すのが一番だと思っから返信がないのは仕方がない。

今は昼休み。例によって、今も外を見ている。

「今日も雪がすごいや」

教室の中は暖房がついていても暖かいが、窓の外から見える風景は白一色だった。

今日はテレビの天気予報通りの猛吹雪である。

いつもなら上から下に降ってくる雪も、風のせいで右から左へと流れている。

この調子だと帰りの電車は全く動いていないかもしれない。

いや、北海道のJRはこんなことじゃ遅れないか。

そんなことを考えながら窓の外を流れていく雪を見ていた。

「あれ。キツネじゃない？」

ふと横から声をかけられた。

声が出た方向を横目で確認してみると、窓の柵に手をつけて外を見ている男子がいた。

「ほら。どっか行っちゃっ」

そう言われて私は慌てて視線を外に向けた。
吹雪のため視界は激悪だが目を凝らして探す。

「どこ？」

「あの木の近く」

言われた木の近くを見てみると、確かに黄土色をしたキツネがいた。
初めて見たわけじゃなくて中学校の時も時々見たことがあったけど、
やはり見れると少し嬉しい。

私自身はこの学校に入って初めて見た。

「俺今年初めて見た」

「私も」

「おい正樹！次移動教室だぞ！」

「うわっ！ちよっと待ってくれよ！ってわけで移動教室だから。吉
野さん。遅れたらダメだよ」

そう言っただけで友達のとこへ戻っていく男子。

どうやらボケーっとしていた私に移動教室のことを伝えに来てくれ
たらしい。

すっかり忘れていたけど次は理科室で実験をするんだった。

いつもなら明子が教えてくれるんだけど今日は居ない。

彼が来てくれなければ、私は授業開始のチャイムが鳴ってから慌て
て移動することになっただろう。

ありがたき幸せ。

それにしても全然話したこともないただの同じクラスの女子に話し
かけてくるなんて珍しい人だ。

理科室に向かいながらさっきの男子生徒について考える。

同じクラスなんだろうけど名前が・・・たしか『正樹』って呼ばれ

てたような気がする。
私は名前を覚えるのが苦手だった。

「あの、さっきはありがとう」

今日最後の授業の前の休み時間。
私は彼にさっきのお礼を言った。
私の席は窓側の真ん中ぐらいの席で、彼の席は廊下側の一番後ろの席だった。

「わざわざお礼？別にいいのに」

笑いながら、どういたしまして、と言う彼。

「だって……えーと……」
「ん？」

彼が不思議そうな顔をする。

「ごめん。名前聞いてもいい？」
「え……加藤です」

そりゃ驚くわな。

ほぼ一年間一緒に過ごしてきたクラスメイトの名前もわからないなんてどうかしていると自分でも思った。

「もしかして名前覚えてなかったの？」
「ごめん。私あんまり話さないから」

「いや、いいんだけどさ。でもなんかちょっとショック・・・」

あからさまに肩を落とす加藤君。
なんか・・・ほんとに申し訳ない。

「あ。冗談冗談！吉野さんは気にしないで！」

「なんで私の名前？」

「これが普通だと思っただけだなあ」

「私の普通とは・・・私がズレてるのね」

「かもね」

加藤君はそう言って笑った。

「これからもたまたまに話しかけてもいい？」

「加藤君がいいなら私はかまわないけど」

「ほんと！？良かったー。なんか吉野さんってちょっと近寄りがい感じだったから断られたらどうしようかと思った」

「そんなに近寄りがたい？」

ちょっとショックだった。

普通に過ごしてるだけなのに。

いや、私の普通はズレてるんだっけ。

「ちょっとね。照井さん以外と話してるのは見たことなかったし、

それ以外は頼杖ついて外見てるだけだったし」

「だって明子しか友達いないもの」

「そうなんだ・・・じゃあ僕と友達になってよ」

「そこは契や・・・いや、なんでもない。別にいいけど、友達になっ
つてどうするの？」

明子とは共通の話題があるからまだわかるけど、彼は特になにも接点がない。

「仲良くなるうよ。せっかく同じクラスなんだし」

「まあそれもいいかもね。よろしく、加藤君」

「こちらこそよろしく、吉野さん」

これが私と正樹のファーストコンタクトだった。

私と正樹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

初めは結構のんびり進めていきます。

気長にお付き合いくださいませ。

次回もお楽しみに！

友達

学年が変わり、高校2年の4月。

学年が上がる際のクラス替えがあつたけど、私は明子と同じクラスになれた。

加藤君とも同じクラスだ。

加藤君とは明子ほどではないけどそれなりに親しい関係になつていて、連絡先を交換したり私の趣味を打ち明ける程度の仲にはなつていた。

私はオタクである。

明子と友達になつた時は

「ねえ吉野さん」

「何？というか誰？」

「誰つてヒドイな。私は照井明子。そんなことより、そのケータイに付いてるのつて・・・」

「え？わかるの？」

「まあね。私も好きだし」

「へえ。ちよつと意外かも」

「そののどんなところが好き？」

そんな感じで明子とは仲良くなつた。

でもオタクであることは二人とも隠していた。

同じクラスにオタクっぽい集団がいるんだけど、あからさまに避けられていた。

時々「フヒヒw」とか「マジで萌えるよな！」とか大声で言ってるのを見ると、あんなのと一緒にされたくない気持ちが芽生えた。

どうしてあーゆー人たちはオタクアピールをするのだろう？

吹っ切れたというよりも、何かしらのオタクであることを自慢して

いるように見えて仕方がなかった。
そんなこともあるせい加藤君にも隠していたんだけど、これからも友達でいるためには話しておかなければいけないと思いきなり話を試してみた。

「私オタクなんだ」

「へえー。そうなんだ」

「・・・それだけ？」

「え？なんかごめん。突っ込んだほうがよかった？」

「いや、なんていうか、オタクだよ？」

「えーと・・・別にいいんじゃない？個性だよ。個性」

全然気にしてなかった。

むしろ喜んでた。

「これって僕しか知らないの？」

「まあ明子は知ってるけど」

「じゃあ男子では僕だけ？」

「まあそうなるね」

「エへへ」

なんかよくわからないけど、軽蔑されたりしなくて良かったと思っ
た。

オタクのことを知っても全然態度が変わらなくて良かった。

加藤君はわりと誰とでも話すみたいで友達も多かった。

話しかけられても嫌な顔一つしないで楽しそうに話していた。

今回もクラス替えがあった直後なのに、クラスのほとんどの人の名前を覚えていた。

今も明子と三人でその話をしていた。

「え？普通じゃないの？」

「加藤君のいう普通ってハードル高くない？ハードルってゆーか棒高跳びの域なんだけど」

「照井さんはもう覚えてるでしょ？」

「名前は自然と頭に入っていくものですよ。加藤君や」

「つまりどういうこと？」

「まだ覚えてないってこと。で、君子きみこは？」

「私に聞いちゃうの？」

「「ですよー」」

三人で笑った。

こんな日が続くと思ってた。

「アンタ最近調子乗ってない？」

ある日、トイレに行った明子を見送った教室で同じクラスの女子何人かが私の席へ来て言った。
もちろん名前は覚えてない。

加藤君は他の友達とどこかに行っていた。

私は意味が分からず聞き返す。

「調子に乗ってるって？」

「最近アンタ正樹君と仲良いみたいじゃん。それが調子乗ってるって言うんだよ」

「それがどうかしたの？」

「そーゆー態度がムカツクんだよ！」

ガンツと机を蹴る。

その音にビクツとなつて教室にいた人たちの視線が私の席に集まる。しかしそれも一瞬で、みんな視線をすぐにそらす。私は思った。

これがイジメってやつか。実際に自分が当事者になるなんて思ってなかったから全然実感がなかった。

でも現に今、明子も加藤君もないタイミング、つまり私が一人の時に狙つてきたってことはそーゆーことだろう。からだはいつもよりぎこちない動きをしているけど頭は冷静だった。

「なんか言えよ」

「私と加藤君はただの友達・・・」

「アンタに無理矢理合わせてるだけだったの。それぐらい気づけよ」

最後まで言わずに連れの子が笑う。

「とにかく調子に乗りすぎんな。次は無いからな」
「君子？」

明子が教室に戻ってきた。それを確認すると女子達は去っていく。少しホツとした。

「どうしたの？なんかあった？」

「うっん。ちょっと話してただけ」

「そう？ならいいけど」

教室の異様な空気に気づいて明子が心配してくれたのに、私はごまかしてしまった。

それが全ての始まりだった。

友達（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

しばらく鬱展開が続きますが、あと数話の辛抱です。

お付き合いください。

今回は勢いだけじゃないんだからね！

ちゃんとラブコメにしてやるんだからね！

ということでも次回もお楽しみに！

イジメ

あの日を境に私はやたらと絡まれるようになった。

一人の時に悪口を言われるのは当たり前前で、すれ違いざまに足をかけられたり、上靴が片方だけ全然違うところにあったり、机の中に画ビヨウが大量に入っていたりもした。

全部挙げるとキリがないけど、全部私が誤魔化せば隠せる範囲のイタズラだった。

しかし私は明子や加藤君に迷惑をかけたくなかったので隠し続けた。明子も私と同じで学校には友達が居なかった（学校外にはいるらしい）から一緒にいることが多かったけど、それでも少しだけ明子が離れるタイミングを見計らってやられていた。

それでも私は明子にバレないようにしていた。

陰湿なイジメが始まって1ヶ月が経とうとしていた。

「君子。大丈夫？」

「え？何が？」

「何がって・・・なんか最近ビクビクしてない？」

ドキッとした。

できるだけバレないようにしていたのに無意識のうちに態度に出てしまっていたようだ。

「そんなことないよ。多分昨日見たテレビが怖かったからかも」

「そう？ならいいんだけど。なんかあつたら言っただけね」

そんなある日。

机の中に手紙が入っていた。

私は二人に気づかれぬように恐る恐る開いてみた。

『今日の放課後、校舎裏に來い。來なければ照井にバラす』

校舎裏には学校の中からも、グラウンドからも全くの死角になっている場所がある。

多分そこに来いということだろう。

私は放課後、明子に適当な嘘をついて指示通りに校舎裏に行った。

明子にも加藤君にも迷惑はかけられない。

私が校舎裏についた時には誰もいなかった。

それから10分ぐらい待った。

コツコツとローファーがコンクリートの地面を鳴らす音が聞こえてきた。

だんだん近づいてくる。

ついに私の視界に3人が入った。

「うわ。ホントにいるし」

「何の用？」

「勝手にしゃべるな！」

言いながら一人が蹴ってきた。

私は避けることができずに、そのまま左足に受けて膝を付く。

「お前な。いい加減にしろよ？私たちが忠告してやってるんだから大人しくしてろよ」

「だからただの友達・・・」

「しゃべるなって言ってるだろ！」

また私を蹴ってきた。

今度は一発だけじゃなくて二発、三発と続けて蹴る。私はずい耐え切れなくなってその場に倒れる。

「なんかむかついてきた。お前の髪って私の髪型をかぶってるんだよな」

「たしかに！」

「ねえ切っちゃおうよ。ほらハサミもあるし」

「準備いいなあ。よし。これから散髪してやるよ」

ハサミを持っていない二人が私を無理矢理起こし、両腕を押さえて壁に立たせる。

「ちゃんと押さえとけよ」

髪の毛にハサミが近づいてくる。

髪で済むなら安いもんだと思った。

きつと切ったら満足してイジメが終わるかもしれない。そう考えていた。

しかし現実はそのなにごくなかった。

腕を押さえていた一人が言った。

「こいつの制服切っちゃえばもう学校来ないんじゃない？」

「たしかに」

「お前頭いいな。じゃあ散髪から制服の裁断にするか」

髪の毛に迫っていたハサミは方向を変えて、スカートの裾へと向かっていった。

制服を切られたらバレちゃう！

親にも隠してるのに！

私は必死に抵抗した。

「こいつ急に暴れやがって!」

「おとなしくしろ!」

両腕を押さえられながらも必死に抵抗する私。

しかしハサミは止まらない。

ついにはスカートを手で押さえながらハサミを入れてくる。

「何やってる!」

その声に反応して全員が声のした方向に目を向けた。

ハサミを持った女の後ろに加藤君が見えた。

「加藤君・・・」

「吉野さん!?!」

驚いて目を丸くする加藤君。

三人はハサミを後ろ手に隠すと、何もなかったかのように私を開放した。

「・・・何してるの?」

「・・・」

私は答えられない。

「私たちと遊んでたんだよ。なあ?」

「そうそう!」

「たしかに!」

三人は口々に言った。

「そつなの？吉野さん？」

何も言えずにただ立っているだけの私。

「吉野さん。こっちに来て。一緒に帰ろう？」

フルフルを首を振る。

「ねえ。正樹くん。もうこんなやつに関わるのやめなよ」

一人が言った。

「どうして？」

「だってこんな根暗で地味なやつと、正樹くんみたいな元気な人は関わっちゃいけないと思うんだ」

「たしかに」

「私もそう思う！」

「でも僕は吉野さんの友達だし」

「友達って・・・私たちは友達じゃないの？」

「友達だけど、吉野さんも友達だから」

「じゃあ私たちと吉野さんならどっちを選ぶの？」

私のほうを見てくる加藤君。

「吉野・・・さんかな」

「加藤君・・・」

途端にしおれた様子になる三人。

「わかった。こいつのことが好きなんですよ！」

ハサミを持っていた女が叫んだ。

他の二人も驚いている。

私はドキツとした。

「・・・うん」

「え・・・」

加藤君は私を見ながら頷いた。

「マジかよ・・・帰る」

「ちよつと待てよ！置いてくなよ！」

「たしかに！」

そう言っつて三人は加藤君の横を通つて去つていった。

イジメ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

一応次で過去編が終了します。

今のところ君子目線でお送りしていますが、真の主人公は最初に出てきたあの男ですからね。
期待しててください。

では次回もお楽しみに！

転校

私と加藤君はその後のなりゆきで付き合うことになった。

って言っても、加藤君はみんなに内緒にしておいて欲しいらしく、まだ誰にも言っていない。

もちろん明子にも。

そしてその次の日からイジメは無くなった。

というよりも今まで以上に加藤君が近くにいるようになったので、イジメができなくなったと言う感じだった。

そして私と加藤君が内緒で付き合い初めて1ヶ月ぐらいが経ち、6月も終わりに近づいてきたある日。

その頃には、二人の時は互いに名前で呼び合っていた。

明子が掃除当番で遅くなるので、学校帰りの駅までの道を二人で歩いていた時だった。

「え？転校？」

正樹が大阪へ転校するということを聞かされた。

転校は前から決まっていた、夏休みには引越してしまっらしい。

「そうなんだ・・・」

「ごめんね。なかなか言い出せなくて」

「ううん。私たちはどうなるの？」

「どうしたい？」

そう聞かれると困る。

私は遠距離でもなんでもいいから正樹との関係が続けたかった。

「遠距離とか・・・ダメかな？」

正樹が迷惑ならと思ったけど聞いてみる。

「遠距離ってつらいよ？なかなか会えないし、何かあってもすぐに行けないし」

「でも気持ちがあつながつていれば大丈夫だよ！」

「・・・そうだね。じゃあまた大人になったら会おう！」

そう約束した。

そして正樹は7月の終業式の次の日には引越していった。私と明子は二人で空港まで見送りにいった。

「見送りなんていいのに」

すこし照れたように微笑む正樹。

「そんなこと言わないでよ。最後かもしれないんだから」

「それフラグ」

明子が縁起でもないことを言う。

「アハハハ。じゃあね。照井さんも君子も元気だね」

「うん。メールとかするね」

「加藤君も頑張れよ！」

搭乗口へと姿を消していく正樹君を見送った。

その帰りの電車の中。

「君子と加藤君って付き合ってたんでしょ？」

「え！？なんで知ってるの!?!」

「そんなのバレバレだよ。見てたらわかるって」

「バレてたのか・・・」

テヘへと頭をポリポリとかく。

「さみしくないの？」

「そんなこと・・・ないよ・・・」

しばらく正樹に会えないと思うと涙が溢れてきた。

「ほら。俺の胸を貸してやるよ」

「誰それ・・・」

明子の冗談にツッコミを入れて乗り換えの駅まで私はずっと泣いていた。

そして今、高校3年の5月。

正樹とはあれ以来ずっと会っていないけど、心が通じ合っていると信じて遠距離恋愛を続けている。

最初のうちはどうしようもなく会いたくなっただけど、そういう時は正樹に電話をしたりして気を落ち着けていた。

こんなに会えないのが辛いものだとは思っていないかった。

会えない。触れない。声が聞けない。顔が見れない。

そんなこと愛があれば何とでもなると思っていたけど、正直会いに

いきたい。

でも約束は約束だ。

いつか大人になったら会うその日まで、頑張って人生を過ごしてやる。

「俺と付き合いませんか!?!」

「断るっ!?!?!」

こいつも振って振って振りまくってやる!?!

転校（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

やっと過去編が終わりました。

次回からはストーリーカー編です。

次回もお楽しみに！

ストーカー

変な男を振り続ける生活を続けて、現在6月。
5月のGWの休み明けから付きまとわれていたから、かれこれ1ヶ月になる。

「付き合ってくれ!」

「断る!何回言わせるの!」

「何回でもさ!」

もうホントにこりないやつ・・・

「なら聞くけど、私のどこが好きなの?」

「どこって言われたら困るんだが・・・全部だ!」

「はいダメー」

「なんでだよ!」

「全部ってことは曖昧すぎるから」

「謀ったなー!シヤア!」

「君の父上がいけないのだよ。って何言わせるんだ!とりあえずダメだ!」

振り向いて帰る。

なんか調子狂うな。

あの人、私のオタクネタのツボをことごとくついでくる。
やれやれだぜ。

家に帰ってメールを送る。

最近正樹は忙しらしく、メールはたまにしか返ってこない。
でも私と正樹は心が通じ合っているから問題ない。

次の日の朝。

「最近加藤君とどう？」

隣の席に座っていた明子が声をかけてきた。

明子とは3年になっても同じクラスで、しかも今は席が隣同士だ。

「なんか忙しいみたいであんまり連絡とってないかな」

「ふーん。じゃああの変な奴は？」

「あいつは相変わらずつきまとってくるよ。ホント勘弁して欲しいよ。こないだもガンダムネタで攻めてきて、思わず乗っちゃったもん」

「マジで？すごいなー。そこまでの確に君子の趣味を突いてくるとはなかなかやるな。ゲルググと名付けようか」

「なんでゲルググ！でもホントに的確なんだよねー。どっかで会ってるのかなあ？」

「私に聞かれても困るわ」

「だよー」

「よーし席つけー」

「あ、先生だ」

先生が来たので会話を中断して授業に集中した。

そして放課後。

「アナタノコトガー好キダカラー！」

「.....」

「ちょっと！無視！？無視は勘弁してください！」

「もう何回来れば気が済むの?」

「あなたが僕の気持ちに答えてくれるまでです」

片膝について手を差し伸べてくる。

「だが断る」

その手をバシッと払って歩き出す。

「断らないでよ!加藤よりも俺のほうが絶対にいいって!」

ピタッ。

思わず止まった。

「どうして正樹を知ってるの?」

「あ……いや、その……」

「そんなことまで調べてるの?サイテー」

後ろで何か言っているが無視して歩き出す。

ただのストーカー気味の男だと思ってたのに、ホントのストーカー
でしかも正樹のことを悪く言うなんて許せない。

次の日。

ストーカー男は現れなかった。

ついに観念して告白するのをやめたのか。

長かった。やっぱり昨日の一言が決定的だったんだと思う。

我ながらすごい冷たい声で言ったと思う。

あんなやつに同情なんてする価値も無い。

そのまた次の日。

またストーカー男は現れなかった。

更に一週間。

あれから一度もストーカー男は現れなかった。

私にとってはこれが普通なんだろうけど、少し罪悪感を感じた。

いや、ホントに少しだけだよ？1ミクロンくらいだよ？

この話を明子に話した。

「いいことじゃないか」

「そうなんだけど・・・」

「なになに？もしかしてもしかしてちょっとさみしいの？」

「そ、そんなことないよ！」

「必死になるところがまた怪しいでござる」

「ちよつとからかわないですよー！」

別に異常から通常に戻っただけなんだから問題ないはずだ。

それに私には正樹が・・・

「正樹・・・何してるんだろ・・・」

あの男のせいで忘れてたけど、ここ最近正樹から連絡がないんだっ

た。

電話は無理でもメールぐらいくれたらいいのに。

まあ今年を受験もあるから授業とか大変なのはわかるんだけどちょっとさみしいなあ・・・

ストーリーカー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とかいただけると発狂してます。
ここまでテンプレ。

こんなストーリーカーなら楽しそうですね。

次回もお楽しみに！

公園

ストーカー男が居なくなつてから丸二週間。

一つの厄介だった問題が解消された私は、正樹のことで頭がいっぱいになりつつあった。

どうして電話くれないの？

どうしてメールの返事をくれないの？

今なにしてるの？

時々ひどくなると、夜に勉強をしていて泣き出してしまうほどだった。

「でも正樹と私は・・・」

本当に正樹と私は心が繋がっているの？

そんなことまで考えてしまう私はダメな子だ。

あの時私のを助けてくれたんだから、今度は私が頑張らなきゃ。我慢我慢！

「君子・・・大丈夫？」

ある日の朝、学校で明子に言われた。

「あんた泣いたでしょ？」

「なんでわかるの？」

「だって目の周り真っ赤だよ。なんか辛いことあった？」

「まあ・・・ちよつとね」

「私で良ければ話聞くんよ」

私は明子に甘えて話を聞いてもらうことにした。
いい友達を持ったと思った。
そして放課後。

いつもの帰り道とは少し離れたところにある、公園のブランコに二人で腰掛けた。

通学路とは少し離れているから、他の人が来ることは滅多にない。
私は正樹のことについて色々話した。

「もしかしてだけどさ、加藤君ってもう別れたんじゃない？」
「やっぱりそう思う？」

私も少し思っていた。

「でも連絡ぐらいいしてくれてもいいのにね。と私は思っけど、君子から電話はしたの？」

「してない。なんか怖くて」

「そりゃ怖いかもしれないけど、そのままズルズル引きずっていくよりはいいと思うけどなあ」

「うん・・・」

明子はブランコをこぎながら私の返事を待っている。

でも私はなかなか踏ん切りがつかなかった。

正樹のことはすごい好きだ。

それに正樹がホントに忙しいから連絡できないのかもしれない。

でもいくらなんでもこれはおかしい。

もしかしたら事故にあって連絡ができないのかもしれない。

でもだからといって電話ぐらいいは使えるはずだ。

いろんなことを頭で考えてしまう。

これが遠距離恋愛なのだ。

相手からの情報がないとなにもわからなくなって、結局自分自身で

解決せざるを得なくなつて、どんどんどんどん悪い方向へと考えてしまふ。

「明子……私どうしたらいいんだろう……」
「君子……」

答えを待っていたはずの明子も、私の表情を見て返す言葉がなくなつてしまつたようだ。

「なら俺に任せてくれないか！」

突然、公園の中に声が響いた。

何事かと思つて公園の入口を見てみると、あのストーカー男が立っていた。

「何あれ？」

「えーと、照井明子さんだつたかな？はじめまして。長谷川隆夫と
言います」

「あ。ご丁寧にどうも」

「おじぎしないでよ！明子！あいつが例のストーカーよ！」

「なんと！やっぱり変態紳士つていたんだ！」

変なところに驚いている明子を横目に、ストーカーに声をかける。

「なんの用？」

「そんな冷たい目で見ないでくれ」

「明子。帰りましょう」

「だから無視はやめてって！」

「なんか言ってるけどいいの？」

「いいのよ。いつものことだから。帰りましょう」

「加藤の話だろ？」

唐突に話を戻すストーカー。

「まさか立ち聞きしてたの？」

「違う。うちはそこだ」

彼の指さした方向を見ると、公園の周りを取り囲むような形で生えている木の隙間から家が見える。

あそこからならこの公園はばっちり見えるわけだ。

「たまたま窓の外を見たら、ブランコにすぐしょんぼりした吉野君子がとお友達が座っているではないか。こんなにしょんぼりさせるのは加藤のやつしかいないと思った。そして家から出てきて今に至るといわけだ」

「説明乙。つまりあんたは加藤君について何か知っているということ？」

「まさにそのとおりだ」

自信満々に胸を張るストーカー男。

ホントに大丈夫なのだろうか？

公園（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

真実

「じゃあまずはウチにくるか？」

「行かない。ここで聞く」

「さいですか」

なぜかしよんぼりするストーカー。

すぐに背筋を伸ばして気を取り直して話し始めた。

「俺には大阪に友達がいるんだ。この間のGWにその友達が大阪案内をしてくれるっていうから、飛行機に乗って行ってきたんだ」

急にストーカーの大阪旅行記が始まってしまい、私と明子は顔を見合わせた。

アイコンタクトの結果、何か意図があるのだろうかということで大人身しく聞いていた。

「……で、そんなこんなで大阪に着いた俺は、空港で待つてくれた友達と一緒に観光して一日目を友達の家に泊まった」

「これちゃんと正樹に関係あるんでしょうね？」

「まあのんびり聞いててくれ。そして次の日だ。友達が紹介したいやつがいるって言うから、一緒にそいつと待ち合わせている駅まで行ったんだ。なんでも去年の夏休み明けに転校してきて、俺の友達と仲良くなったらしい」

「夏休み明けって……」

「そうだ。そいつが加藤だった。加藤はすごい馴染みやすいやつで俺とも仲良くなった。そして俺たちはまた観光……というよりも道頓堀に遊びに行った。さんざん遊んだあとに夕食をファミレスで食べてたんだ」

「で、長谷川君は北海道からわざわざ来たの？」
「まあな。こいつが観光案内してくれるって言うからな。飛行機代だけで良いっていうからこいつの家に泊まった」
「まあ最終日に全額請求するけどな」
「お前鬼か！」
「僕も北海道出身なんだよー」
「へえーそうなのか。どこらへん？」
「えーと札幌の端っころへん」
「マジで？俺もそっちの方だ」
「ホント！？もしかして学校も一緒だったりして」
「俺は相野あいのの高校だ」
「うそ！同じじゃん！」
「マジでか！！何組！？」
「9組」
「あーなら仕方ないよな。俺1組」
「あー反対側だもんねー。そりゃ会わないかもねー」
「そっぴやこいつ彼女置いてきたらしいぜ」
「だから彼女じゃないってば」
「どういうことだ？」
「ほら。話してやれよ」
「わかったつてば。いじめてるところを助けたら勢いで付き合っちゃった彼女がいたんだ。でもその時には転校も決まってたし、それまでなら別にいいかなーって思って付き合ってたんだ。で、その転校するつて言った時に遠距離でもいって言われちゃって。僕はそんな気はなかったんだけど、向こうは別れる気はなかったみたいで・・・で毎日のようにメールがくるんだけど、最近はもう返事も返していないかな」

「お、お前はそいつのこと好きじゃないのか？」

「もともと友達以上ではなかったよ。助けたのだったまたまだし。友達が困ってたら助けちゃうでしょ？」

「まあ確かにそうだが・・・なんて子なんだ？」

「同じ9組の・・・って今は多分違うけど。吉野君子って知ってる？」

「いや、知らない」

「こんなこと言わないでよ。これは僕たちの秘密だからね？今だから言える～的なやつだよ」

「もちろんだよ！な。隆夫？」

「も、もちろんだ」

一通り話したストーカーがこちらへと目を向けた。

話しながらジェスチャーも加えていたのに、なぜかわかりにくかった。

でも正樹のことだけはちゃんとわかった。

「正樹はわたしのことも思ってたんだ・・・」

「君子・・・」

「・・・私なにしてるんだろ？」

「まあこつちに戻って来て、早速吉野君子を探したんだ。顔がわからないやつを探すのは大変だった」

「ならなんであんたがストーカーまがいのことをしてたのよ」

君子がストーカーに向かって言う。

「少しでも加藤のことを忘れてほしくてな。俺は不器用だからそんな方法しか思い付かなかったんだ。吉野君子を見つけた時、すごいつらそうな顔をしていたのを覚えている」

見すぎじゃない？とも思ったけど、そんな軽口を叩けるような心情ではなかった。

「だから俺は変なやつを演じることで吉野君子につきまとったんだ」
「あんたいいやつだな」

「まあ困ってるやつがいたらほうっておけないんだ。それに迷惑をかけたのは事実だ。すまなかった」

「いやいや、あんたは悪くないよ。むしろ感謝すべきだ」

明子とストーカーの二人で話が進んでいく。

正樹がホントにそんなこと言ったの？
信じられない。

私は正樹のことが好きだったのに・・・
私の気持ちはどうなるの？

「・・・嘘でしょ？」

「「え？」」

「嘘なんでしょ？正樹がそんなこと言うわけないもん。ねえ、あなたが勝手に作った話なんでしょ？」

ストーカーの肩をつかんで前後に揺らす。

「残念だが真実だ」

真実（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると興奮します。

だんだんと話が暗くなってきました。

ということで次回もお楽しみに！

ぐちゃぐちゃした気持ち

残酷な真実を叩きつけられた私は、いつのまにか家で寝ていた。どうやって帰ったかもわからないぐらい記憶がぐちゃぐちゃになっていた。

もしかして全部夢だったのかなあ？

そう思っただけケータイを開いてみると、返事が返ってきていないメールの履歴。

それだけで現実に引き戻される。

また悲しくなる。

必死にあの話を嘘だと信じたい自分があるのだが、現状を見る限りでは真実を受け止めるしかないような気がしてくる。

信じたくないのに信じるしかない。

正樹を信じている自分を信じたいのに、信じれる要素がない。

こんなに遠距離恋愛が辛いものだとは思わなかった。

もし遠距離じゃなければ、今すぐ会いに行っただけで事情を聞けるのに・

話を聞きたい。声が聞きたい。本当のことを聞きたい。

片方が拒否するだけで全部できない。

心どころかケータイすらつながってないじゃないか。

「こんなおもちゃなんかっ！！」

壁に向かって思いっきりケータイを投げつけた。

開いたまま投げたせいで変なぶつかり方をし、上下を繋ぐ部分が壊れて綺麗に二つになった。

一瞬やってしまった、とも思ったけど、どうせ連絡も来ないんだしもう私には必要なかった。

制服を着たまま布団の中に潜り込んだ。

次の日。

朝になってお母さんが起こしに来たけど、頭が痛いと言っていて学校を休んだ。

両親は共働きのため、昼間は誰も家にいなかった。

静かな家の中でその日は布団の中に潜って、一日中沈んだ気分のみま過ごした。

その次の日。

また嘘をついて休んだ。

お母さんは病院に行くように言ったけど、寝てれば治ると言っていた布団の中で過ごした。

そのまた次の日。

土曜日のため学校は休みだった。

お母さんが朝に様子をみに来たけど、また仮病を使って布団に引きこもった。

だんだんと気持ちが収まってきたけど、なんとなく布団から出たくなかった。

「お姉ちゃん大丈夫？」

顔を向けると、中学1年の妹の一美かずみがドアから部屋をのぞき込んでいた。

この間まで小学生だったのに、今はもう中学生だ。
時が経つのは早いなあ。

「大丈夫だよ」

「あのね。明子さんからメールがきて、お姉ちゃんのケータイに繋がらないから様子を見てくれって言われたの」

明子と一美はメールアドレスを交換している。

無理矢理明子が聞いたんだけどね。

リアル妹がほしかったらしい。

「ごめんね。大丈夫って言うつといて」

「わかった。お姉ちゃんのケータイは？」

そういえば壊れたんだっけ。

「あれ？それ・・・ケータイ壊れたの？」

「あっ！」

一美があざとく床に落ちたケータイを見つけて拾い上げる。
慌てて布団から出てケータイを取り返そうと立ち上がるが、近頃の
布団生活のせいでからだバキバキいって動きにくくて一美までた
どり着けない。

「お姉ちゃん・・・大丈夫？」

「ちよつと返して・・・」

「そんなことよりヒドイ顔だよ？」

「・・・メイクしてないからさ」

「お姉ちゃんメイクしないじゃん。お母さん呼んでこようか？」

「大丈夫だから！お母さんには言わないで！」

つい大声を出してしまった。

「・・・わかった。なんかあったら言ってよね。私たち姉妹なんだし」

「・・・うん。ありがとう」

ケータイを私の手に置くと、一美は部屋から出ていった。話のわかる妹でよかった。

昔から小さいくせに空気の読める妹だった。自慢の妹だ。

「はぁ・・・どうしょ」

もうこれだけ休んだりしていると部屋から出にくくなっちゃったなあ。きつと明子も心配してるみたいだし。そろそろ学校にも行かないと思って思うけど、正樹のことを考えるとすごい辛くなってくる。

「お姉ちゃん」

閉じたドアの向こうから一美の声がした。

「何？」

「これから明子さんたちが来るって」

「え？明子に言ったの？」

「何も言っていないよ。言ったらお姉ちゃん怒るでしょ？」

「そっか。ごめん」

「別にいいよ。明子さんから伝言。私が行くまでに風呂に入ったり歯磨いたりとかしとけ！だって」

「・・・わかった。ありがとう」

私はシャワーに入って歯を磨いてさっぱりした。

そしたらお腹が減ってきて台所で冷蔵庫を漁ろうとしていたら、お母さんがおにぎりを作ってくれた。

それを部屋に持っていき、明子が来るまで食べながら待っていた。しばらくしてインターホンが鳴った。

妹が出たらしく、部屋まで明子を案内してくれた。

「なんであんたもいるの？」

私の部屋の前にいたのは、明子だけじゃなくてストーカー男も一緒だった。

「あのあと気になってたんだが、吉野君子がなかなか学校に来ないから困っていたんだ」

「だから今日お見舞いついでに連れてきたの」

「一応女子高生の部屋んだけど・・・」

「大丈夫だ。俺は気にしない」

「私が気にするっつーの!!」

ぐちゃぐちゃした気持ち（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とかいただけると見えないところで激しく踊り狂います。

なんか沢山書いてる気がするんですがまだ一桁話なんです
多分そろそろ鬱ターンが終わるはずです。

なんかデジャブ・・・

次回もお楽しみに！！

決意

「ちょっと！じろじろ見ないでよ！」

「見ていない。マンガのタイトルを見ていただけだ」

部屋に入るなりジロジロとストーカーが漫画をおいてある棚を見ている。

私は勉強机の椅子、明子はベッドを背もたれがわりにして床、ストーカーにはクツキーの大きいクツションを貸して本棚の前へと、それぞれが座った。

「意外と少ないんだな」

「「!？」」

私と明子はびっくりして顔を見合わせた。

女子高生の部屋にしては多いと思っていたんだけど、少ないとか言われたのは初めてだった。

明子情報によると『私が今まで見てきた女子高生の中でも一位二位を争うような多さだ』ということだった。

特大の本棚2つ+ があってもまだ少ないと言うのか。このストーカーは。

「そ、そんなに少ないの？」

「あ、いや、吉野君子のあのネタの引き出しの量からしたら少ないなと思ったただけだ」

「そーゆーことか。私はガンダムとかはレンタルしたりして見ただけだからさ。でもジョジョは全部持つてるよ」

「ああ。俺も全巻持つてる」

私にとってジヨジヨは心のバイブルだ。
しかもこいつもジヨジヨラーだったとは。

「だよね！面白いよね！……って何しにきたんだ！」
「アハハハハ！！」

明子が突然笑い出した。

「な、なにさ！」

「いや、思ったより元気そうでよかったよ」

目を拭って笑いながら明子は言った。

そつえば落し込んでたことを一瞬忘れてた。

「……うん。まあね。来てくれてありがとう」

「もう大丈夫なの？」

「大丈夫かって言われると微妙だけど……そりゃ正樹のこと思い出すとちよつと悲しくなるし、泣きたくなるよ？でも今日だけで明子にストーカー男に一美にお母さんまで心配してくれてさ。こんなに迷惑かけてるようじゃダメだと思ったんだよね。だから正樹のことはもう忘れるよ。あ、でも忘れるっていうのは無理だけど、次に会ったらぶん殴ってやるぐらいの気持ちで生きていくよ。ってさっきおにぎり食べながら考えてたんだけどね」

「それでこそ私の君子だ！」

「ごめんね。明子」

「気にすんな」

「あとストーカー男もありがとね」

「俺も気にするな。あとストーカー男って言うのはやめてくれ」

「だって名前知らないんだもん」

「名前知らないって……何回も名乗ってるだろ」

「だって興味なかったんだもん」

「なら・・・今はあるってことか？」

「・・・ちよつとね」

・・・恥ずかしいこと言わせんな。アホ。

「そうか。長谷川隆夫だ。よろしくな」

「長谷川ね。よろしく。私は吉野でいいよ」

「吉野だな。じゃあ俺と付き合ってくれ」

「だが断る！」

「そうか・・・なら友達としてよろしくな」

「・・・ホントに好きなの？」

「いや、特になんとも思っていないかな」

「「そうなの!？」」

「まあ知り合い以上恋人未満かな」

「なんなんだよ・・・」

こいつにちよつと興味を持ってしまった私がちよつと恥ずかしいよ!

「あれ?君子?顔赤くな〜い?」

「そ、そんなことないよ!」

「やっぱり吉野はちよつちやくてかわいいな〜」

「ちよつちやくないよ!つてゆーかちよいちよいネタを挟むな!」

三人でアハハハと笑いあった。

この出来事をきっかけとして、私はストーカー男・長谷川隆夫に好意を持つことになった。

念のため言っておくけど、別に好きになつたわけじゃなくて、興味

をもっただけで恋愛感情とかはとくにないからね。
ツンデレじゃないからね！

決意（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

さてさて。長かった鬱ターンも終了となります。

次の話からは僕の暴走回（ラブコメ展開）となります。
鬱のターンはまたしばらく間を置いてからにしようかと。

というわけで次回もお楽しみに！

3組と8組

6月3週目

相野高校3年8組出席番号38番吉野君子。

数字だけ書くと3838となっていてとても覚えやすい。

いや、そんなことはどうでもいい。

今日は明子と長谷川にこの間のお礼も兼ねて何かを奢ろうと考えている。

明子には簡単に放課後の約束を出来たけど、問題は長谷川だ。

あの日、クラスを聞いたところ3組らしい。

同じ学校と言うのはなんとも驚きだった。

まあ2年の時は1組と9組という反対のクラスだったみたいなので知らなくても仕方がない。

うちの高校は玄関が二つある。

東玄関と西玄関があつてどちらからも入ることができる。

靴は玄関にある空いている靴箱のどれを使ってもいいことになっている。

なのでマンガとかでよくある「下駄箱にラブレターが！」っていうのとは全くもって無縁な学校だ。

そして横長の学校なので階段も二つある。

1組から3組は西玄関と西階段、7組から9組は東玄関と東階段を主に使っていて、4組から6組はどちらか好きな方を使っていた。

なので西と東の使用者はそれぞれのクラスとは全く関わりがない人間もいるということになっていた。

私たちと長谷川も例によって関わりがない人間の一人だったというわけだ。

そして今私は長谷川のクラス・3組の前に立っている。

他のクラスに行くのって初めてだから結構緊張するな。

勇気を振り絞ってドアの前に立って長谷川を呼ぶ。

「長谷川！……くん……います……か？」

どんだん声が小さくなった。

みんなの視線がこっちに集まるんだもん。

やっぱりお礼なんてやめておけば良かった。

「あれ？吉野じゃない？」

「たしかに！」

声の方を見ると2年の時に私をいじめていた3人がいた。

一瞬からだがブルつとした。一人がこっちに歩いてくる。

あの時は正樹が近くにいたから平気だった。

でも今はもういない。

逃げ出そうとしたけど、私のからだは凍ったように感覚がなくなっていた。

まさしく蛇に睨まれた蛙状態。

「吉野。あの時はゴメンね。あたしもまだ子供……」

謝られたってなんにも変わらない。

自分は少し楽になるかもしれないけど、相手は一生トラウマになるくらいのダメージを受けているってことをわかってない。

イジメとはそーゆーもんだ。

「吉野？」

ふいに後ろから散々聞いていた声が聞こえた。

動かないからだできこちなく後ろを振り返ると長谷川が立っていた

「あ、は、長谷川」

やっとのことで声が出せた。
でも多分もうここでは声は出せないような気がした。

「どうした？何か用か？」

さっきの元いじめっ子が長谷川に何かを言っている。

私・・・正樹のことで少しは強くなったと思っただけど、少し思
い上がっていたみたいだなあ。

全然動けないししゃべれない。
結局ぐるっと一周したただけで、根本的には何も変わらなかったのか
もしれない。

「吉野。ちよつとこつち来い」

長谷川が私をじつと見る。

いじめっ子がまだ何か言っているのを無視して、長谷川に手を引か
れてその場を離れる。

そのままされるがままに連れて行かれた先は、東階段横の自販機が
あるホールだった。

「ここならさっきの廊下よりは人は少ないだろ」

「あ、ありがとう」

「そんなことよりどうした？なんか用か？」

長谷川は何も事情を聞かないでくれる。

わざとなのかそれとも本当に気にしていないだけなのかわからない。
でもそれが今の私には心地よかった。

凍っていたからだだが溶けていったのがわかった。

「あ、あのね。この間のお礼がしたくて」

「お礼？あれはお見舞いに行ったただけだから別に何もいらぬぞ」
「そういうわけにもいかないの！」

思わず食ってかかる私の頭を長谷川は手で押さえる。

「そこまで必死になるなよ。で、何してくれるんだ？」

「なんか好きなもの奢ってあげる」

「なんかかって言われてもな・・・俺欲しいものは自分で買うから他人からもらったものは使わないぞ」

人が奢ってあげるって言うてるのに、こいつやっぱり変な奴。
ってゆーかこんな人間初めて見た。

普通奢ってくれるんなら奢ってもらうのが常識じゃん。

「えー。なんか奢りがいのないやつだなー」

「えーとか言うな。そんなにお礼がしたいのか？」

「だって迷惑かけっぱなしだったし、私のためにあんなにいる
してくれたわけでしょ？」

「それはそうだが、別にお礼が欲しいとか感謝して欲しいとか思っ
てやったわけでなくて、俺がしたいとおもったからやっただけだ。
だから気にしないでくれ」

こうなったらもう意地でも奢ってやる。

私は目的を『奢ってあげる』から『何がなんでも奢ってやる』にシ
フトチェンジした。

「そんなこと言わずにさ。何か奢らせてよー」

「うーん・・・そこまで言うならひとつだけお願いしてもいいか？」

「さあなんでも言いなさい」

やっと折れてくれた。

思わず笑みが溢れてしまふ。

「俺と普通にいろんな話をしてくれないか？」

3組と8組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

この回からラブコメ展開を増やしていきたいと思っています。
気分が乗らなくて無意味に書き溜めを投稿するのは内緒です。

次回もお楽しみに！

待ち合わせ

私が長谷川に頼まれたのは『一緒にオタトークがしたい』と言うことだった。

あー見えて長谷川は友達付き合いが下手くそらしく（特に意外じゃなかった）、あまりオタトークをしたことがないらしい。

でも私をストーキングしてる時に垣間見せた、あのオタクならではの返しが気に入ったらしく大絶賛していた。

そりゃネタで振られたらネタで返すのが常識だしね。

しかも真正のジヨジョラーに出会ったということもあって、一回腰を据えてじっくりと話をしたかったとのこと。

その話を教室に戻ったら明子にした。

「うはっ。やりおる。長谷川やりおる」

「どういうこと？」

「これで君子に好意が無いつてゆーのがすごいな」

「!？」

「私はお邪魔しないから楽しんでおいでよ」

「ちよつと！一緒に来てくれないの？」

「だってジヨジョラーじゃないし」

つまり放課後に約束した私からのお礼は、私と長谷川のデート（長谷川はそんなこと思っていない）ということになった。

言われてみればそうだよな。

放課後話がしたい 男女二人きり カップルにしか見えない はたから見ればデート

こりゃ大変なことになった。

私だってまだ長谷川のことを好きになった訳じゃないし、長谷川だって私に好意が無いつていうのを言ってるからね。

いや、でもこの場合ってどうなるんだろ？

好意をもってくれたとして考えるべきなのかな？

でもでもただ単にあの時は答えを搾り出した結果、一緒にオタトクしたいって苦し紛れに言っただけかもしれないし。

なんかよくわからなくなってきた。

長谷川も全然表情筋を使って話さないから、感情がよくわからない。私をストーキングしてたときはすごいコロコロ表情が変わってた気がしたんだけど、あれは演技だったのかなあ？

ってゆーか・・・私はいいつのどこが好きなんだ！？

いやいや、別に好きじゃないし。

そんなこんなで放課後。

約束通りに待ち合わせをしている東と西の玄関の中間地点に来た。

互いの玄関が違うので、必然的に外での待ち合わせになった。

でもいざ到着して後悔した。

2年間すごしてきた全く知らなかったけど、この場所はカップルたちの待ち合わせ場所になっていいるらしく、1年も2年も関係なく、カップルたちの片割れみたいな人が待っている。

なんかここにいたら『私彼氏待ってます』みたいなオーラを出しているように見えるんだらうか？

いやいや、そんなオーラ出してないし。

今の私はきつと無表情だし。

ブチャラティのように冷静沈着な顔してるはずだし。

「何ブツブツ言ってるんだ？」

「うおっ！」

「うおっ！って・・・」

突然後ろから話しかけてきた。

長谷川には『背後から忍び寄るスキル』がついているのか？
教室のときといい今といい後ろから声をかけすぎじゃないか？

「びつくりするじゃない。話しかけるなら正面からきてよ」

「仕方ないだろ。西玄関から出たらこつちから来るのは普通だろ。」

吉野が東側向いてたから後ろから話しかけても不思議ではないと思
う

「た、たしかに」

意外と理論的な思考の持ち主だな。
星の本棚とか入れるんじゃない？

「とりあえずここから離れない？」

「ん？わかった。歩きながら話そう」

そう言つて校門へ向かつて並んで歩きだした。
なんか変にドキドキしてきた。

チラッと長谷川のほうを見たけど、相変わらずの無表情だった。

「そういえば照井はどうしたんだ？一緒じゃないのか？」

「なんか用事があるから先に帰った」

「そうか」

沈黙。

そういえば長谷川と二人だけで話すのって、ストーカーの時以外で
初めてかも。

何話したらいいのか全然わからない。

「そういえば一つ聞きたかったことがあるんだが」

「何？」

「俺がストーキングしていた時、どう思っていたんだ？」

「ウザイと思ってた」

即答。

それ以外に思いつかなかった。

「いや、そうじゃなくて。こいつ変なやつだなーとやってことだ」

「ごめん。ちよつと意味が分からない」

ウザイが答えだとダメなのかな？

すごい確な答えだと思っただけ。

「なんて言えはいいの・・・。たとえば俺は吉野のことが好きな振りをしていた。でも吉野は加藤が好きだった。その状態で告白してきた俺にどんな感情を持っていたのかと思っただ。たとえば『少し好きかも』とか『こいつ私を好きになるなんて変な奴』とか」

この間の公園でも思っただけど、説明下手くそだな。

多分頭の中ではわかってるんだけど、人に伝えるのが凄く苦手なんだろう。

でもそんな長谷川は不器用なりに伝えようとしてくれているのが私は嬉しい。

・・・嬉しい？

なんでそんなこと思った？

「で、どう思ってた？」

ひとしきり話した長谷川が相変わらずの無表情で聞いてくる。

私の答えは最初の質問から変わっていない。

「それでもやっぱりウザかった」

待ち合わせ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

テラ少女マンガww

次回もお楽しみに！ww

オタトーク

私と長谷川は高校から歩いて20分ぐらいのところにあるロツテリ
アに入った。

互いにロツテシェーキを奢るか奢らないかでレジでもめたが、結局
私が押し切って奢ってやった。

ちよつとした満足感。

そしてカウンター席についてロツテシェーキを一口飲む。

「なんかありがとな」

「なにが？」

「わざわざこんなとこまで歩かせたし」

「いいよ別に。私も楽しかったし」

歩いてる間はずっとジョジョとかアニメの話をして盛り上がって
いた。

好きなガンダムの機体とか好きなスタンドとか好きなシーンとかと
か。

とにかく盛り上がって話していたら20分はあつという間だった。

気がついたら目の前にレジがあつた感じ。

長谷川に至ってはお店の前に着いたときにびっくりしたらしく「ボ
スの仕業か？」ってつぶやいてたし。

「久しぶりにあんなに喋った気がする」

「長谷川ってあんなに喋るんだね。ちよつと意外だった」

「まあ普段はそんなに話の合う奴がいないからな。話すネタがない
んだ」

「あーそれちよつとわかるかも。私も明子以外とは全然話さないも
ん」

まあ明子と長谷川以外に信用できる人がいないのもまた事実なんだけどね。

実は正樹のことがあってからちよつと人間不信になってたりする。あれから明子と長谷川以外の人とうまく話せないでいる。

そんなことを長谷川に知られたくないから隠していくつもりではない。

「吉野は暗いからな」

「・・・ホント？」

「なんだ。気づいてなかったのか。かなり話しかけにくいオーラを出してるぞ」

全然気付かなかった。

そういえば正樹と初めて話したときも、そんなことを言われた気がする。

でも普通に話しかけられても、話すことがないから別にいいけどね。

「それにしても長谷川ってズバズバ言うよね」

「こーゆー性格だからな。嫌なら治す努力はするぞ」

「努力だけかい」

「努力だけだな。たぶん治らないとは思う」

「ふーん。まあそれが長谷川らしくていいんじゃない？」

「そう言ってもらえると助かる」

横目でこちらを見ると長谷川がわずかに微笑んだ。

正確には口角をほんの少し上げて目をほんの少し細めただけ。

私は長谷川の無表情とストーカーの時のあの謎の演技の表情しか見たことがなかったので、とても新鮮だった。

というより・・・かなりときめいた。

長谷川つてあんな表情するんだ。
かなりドキドキしてると思う。

今のこの中途半端な気持ちを揺れ動かすのには十分だった。

「どっした？」

今度はちゃんとこちらを向いて聞いてくる。

「な、なんでもない！」

「疲れたんじゃないか？さすがに休み明けにこの距離は遠かったとか？」

なんでそんなに無表情で聞いてくるかなあ。

逆にすごいよ。

「大丈夫。大丈夫ですから。疲れてないし楽しいから大丈夫」

私は手を前に出して大丈夫ですアピールをした。

「そうか。ならいいんだ。俺も楽しい」

表情こそ無いけど、長谷川がとても楽しそうなのはなんとなくわかる。

話してる時も声が少し弾んでるし、それになによりよくしゃべる。
好きなものに対して熱く喋るのはオタクの特徴だよー。

多分私という共感してくれる人間がいるから、いつもよりも更にしやべっている可能性もある。

まあ全部私の勝手な妄想だけだね。

「今日はありがとう」

「え？何、急に」

「いやホントは来てくれるとは思ってなかったんだ。加藤のことがあったから、男とは話すのも嫌になるくらい男性恐怖症とかになってるかと思って」

「だいたいあってるんだけどね。」

「でもせっかく出会えたジヨジヨ仲間だから思い切って誘ってみたんだ」

「長谷川にはたくさん借りがあるしね。断るわけにはいかないよ」

「そうだったのか？これは借りを返すために来てくれていただけだったのか？」

「やばっ。なんか変な言い方になっちゃった。」

「いや、そういう意味じゃなくて、私が来たいから来んであって、別にやましい気持ちは」

「やましい気持ち？」

「あ、いや、違う！もーなんて言えばいいの！」

「逆ギレはやめてくれ」

「別に怒ってないわよ！なんだかんだで長谷川にはお世話になったから、長谷川に恩返しをしたいの」

「自分でも何がいいたいのかわからなくなってきた。」

「このままだとあることないこと言ってしまうそうだ。」

「わかった。無理に言おうとしなくていい。実は今日誘ったのは、吉野が奢らせるってクラスまで来たときに様子が変だったから、こんな話をして忘れてもらおうと思ったからなんだ」

「え？」

「吉野は自分では気づいていないかもしれないが、とても危なっかしい人間だと俺は思う」

「どういうこと?」

「加藤の時だってホントに死にそうな顔をしてたし、今日だってクラスに来たときにクラスの女子に話しかけられて固まっていただろっ?」

やっぱり気づいてたんだ。

長谷川は私のことを見すぎだと思う。

そんなんじゃないよ。好きって勘違いしてもおかしくないよ。

もうかなり好きってほうに傾いちゃったじゃないかコノヤロー。

「放っておいて前みたいに休まれても困るし、ましてや自殺とか考えられても困る」

「さすがにそこまでは・・・」

「だから自分では気づいていないって言っただろ。そういう意味で吉野は危なっかしい人間なんだよ」

ホントによく見てるな。

観察能力に優れすぎでしょ。

ジヨルノかよ。

オタトーク（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると頑張れます。

次回、新キャラ登場します。

ということで次回もお楽しみに！

ケータイ

「何読んでるの？」

「ん？新しいケータイのカタログ」

暦は7月の下旬。

今日、終業式が終わって、明日から夏休みだ。

長谷川といる話したあの日から一ヶ月が経った。

あの日以降、特に何も進展がないまま一ヶ月が経った。

長谷川に対する気持ちに気づいてから一ヶ月が経った。

・・・ホントに何もなかったなあ。

そんなことを考えながら私は、家の居間で新しいケータイを買おうとカタログをペラペラとめくっていた。

学校帰りに近くの電気屋さんでもらってきた。

隣で夜ごはんがもうすぐできると聞いて二階から降りてきた一美がテレビを見ている。

ケータイを壊してからケータイの無い生活を続けていたけど、夏休みに入ってから明子と連絡が取れないのはちよつと寂しかったので買うことに決めた。

「それにしてもどれがいいのやら・・・」

まずケータイ会社だけでも3社。

さらにその中でも似たようなケータイがたくさん。

そしてさらにスマートフォンがたくさん。

もうわけがわからないよ。

一美は上にカシヤンって出るタイプのスライド式ケータイを使っている。

「ねえ一美。どれがいいと思う?」

「それくらい自分で決めなよ。困ったら見た目で決めちゃえば?」

「見た目ねえ……」

どうせどれを選んだって結局は『慣れ』だしねえ。

よし。決めた。明日見に行つてこよう。

「一美。明子に『明日暇だったらケータイ見にいかない?』メールして」

「いいけど……明日必ず決めてきてよね」

「なんで?」

「夏休み中ずっと私が明子さんとお姉ちゃんの中継するなんて嫌だもん」

「えー別にいいじゃん」

「なにそれ。なんかお姉ちゃんキャラ変わったよね」

「え?そんなことないよ?」

「……そんなことあるから言つてんじゃない」

私は別にな変わったつもりなんてないんだけど、明子にも同じことを言われた。

やっぱり恋をすると人って変わるんだろうか?

まあいいや。

「あ、返事きた。プツ!断られてるし!』『ごめん、明日は無理だわ』だつてさ」

「ナンテコッタイ。仕方がないけど一人で行つてくるかな。一美も来る?」

「行かない」

「冷たいなあ。ツンデレかよ」

「デレはしばらく来ないけどな」

「じはんできたわよー」
「はい」

そして次の日。

一人で街中まで出てきた。

すぐぶる暑いのでなるべく外には出ないようにしつつ電気屋を目指す。

最近の札幌駅周辺は地下道が発展しすぎていて、外を出なくても大通公園の少し向こう側まで行ける。

一人で街中に出てきたのって久しぶりかも。

高校に上がる前はよく一人で来てたけど、明子と友達になってからは二人で来るのが当たり前だった。

「えーと電気屋さんは・・・」

いろんなところに貼られている案内板を頼りに電気屋までたどり着いた。

そして目の前に広がるケータイコーナー。

うん。まったくわからん。

これどれがいいんだろ。

店員さんと話すのが苦手なので、近づいてきた気配を感じ取りながら、逃げるようにいろんなケータイを見ていく。

でもこれといってピンとくるものがない。

スマートフォンも見てみたけど、私にはまだ早いと思う。使いこなせる自信がない。

「うーん・・・」

立ち止まっていると店員さんが近寄ってきた気配を感じたので、また足を動かして移動する。

店員さんが居なくなれば早く決まる気がする。

店員よ。いなくなれー。

そんな願いは通じず、また気配を感じて逃げ回る。

そしてついにはめんどくさくなってきた。

10分ぐらい歩き回ったのにピンとくるものがなかったせいか、どのケータイでもよくなってきた。

近くにあった赤いケータイに決めた。

赤は3倍早いからな。

「あのすみません」

「はい」

「これください」

「かしこまりました。少々お待ちください」

「ありがとうございます」

無事購入。

帰っているいろと設定しよつと。

時計を見ると時刻は午後1時。

ちよつとお腹空いたなあ。

そう思っていると、目の前のエスカレーターから見知った顔の人が降りてきた。

「あ。長谷川だ」

どうやらこちらの存在には気づいていない様子。
こちらキミーコ。

いつも背後に急に現れて驚かされるから、逆に驚かせたいと思う。
よし。作戦開始。

頭の中で一人会議を行い、長谷川の真後ろまで来た。

長谷川の驚く顔を想像して少しニヤける。

「長谷川！」

少し大きめの声で名前を呼んだ。

期待を見事に裏切って、特に驚いた様子もなく振り向く。

「えーと……どちら様ですか？」

……あれ？

もしかして人違い？

でも長谷川にしか見えない……

「え？あれ？」

でもたしかにいつもの無表情な長谷川と違って表情がある。

それに微妙に目の大きさとかも違う気がする。

「あのー……あ。もしかして吉野ちゃん？」

吉野……ちゃん？

見た目がほぼ長谷川な人にちゃんづけで呼ばれるとなんかムズムズする。

しかもめっちゃ笑顔。

「あ、はい・・・」

「やっぱりそうか！いやーホントに可愛いねー。なんか守ってあげたくなる感じわかるわー！」

「???」

「兄さん。吉野が困ってるじゃないか」

ふいに後ろから声がしたので振り向くと、もう一人の長谷川が立っていた。

「えっ？えっ？」

困惑した私は前の笑顔の長谷川と後ろの無表情の長谷川を交互に見る。

「は、長谷川が二人・・・？」

「吉野。落ち着け」

「そうそう。吉野ちゃんは少し落ち着こうか」

なんだこれ。

「吉野。こいつは俺の双子の兄の長谷川鳴海だ」
はせがわ なるみ

ケータイ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。感想とか書いていただけると頑張れます。

次回もお楽しみに！

ストックホルム症候群

私と長谷川兄弟は近くのオムライス屋に入った。

話を聞くと、あそこの電気屋さんの上のほうの階に、あの有名なモンスター育成ゲームのショップがあるらしい。

そこに二人で買い物に来ていたとのこと。

鳴海さんのほうが好きらしく、長谷川はただの付き添いだそうだ。

ちなみに呼び方は長谷川は長谷川。お兄さんのほうは鳴海さんで定着した。

「えーと、なんて呼べばいいですか？」

「じゃあグリーンで」

「え？なんでライバル？」

「おお！ホントに引き出しすごいね！ここまで知ってるとは。じゃあ鳴海さんでお願いします」

「わかりました。鳴海さんですね」

「それと一応同い年だから敬語は無しね」

「あ、ホント？ちょっと辛かったんだよねー。同い年に敬語とか」

「あれ？結構順応早い？」

「兄さん。そこは突っ込まないと」

「え？どういうこと？」

オムライス屋に向かう時にそんなやりとりがあった。

その時にひとつ分かったのが、鳴海さんは私や長谷川ほど引き出しが多くないらしい。

主にゲームが大好きで、一番がDSのモンスター育成ゲームというわけらしい。

ってゆーかあの一連の流れで気づいた長谷川はすごいな。さすが私
の見込んだ男だ。

そして各自オムライスを注文し今に至る。

「ところで吉野ちゃんは何してたの？」

4人がけの席の向かいに長谷川兄弟が座っている。

顔はほぼ同じ作りだけど、表情が全然違うから見分けられないことはない。

左が兄、右が弟。

「ケータイが壊れてたから新しいのを買ったの」

「へー。どんなやつ？」

「さあ？なんか赤いやつ」

「え？どういうこと？」

よく頭に『？』マークを浮かべる人だ。

今日だけでこのセリフ2回目だ。

私は隣に置いていた紙袋からケータイを取り出す。

鳴海さんに箱ごとわたした。

「なんかどれがいいのかわからなかったから適当に近くにあったやつにしたんだ」

「すごい選び方だね……。隆夫。吉野ちゃんってこんな感じなの？」

「いや、これは俺にもよくわからん。でもいろいろと適当なところもあるな」

地味に『適当』ってひどいな。

見てもわからなかったのか、箱を私に返してくる。

「へー。吉野ちゃんってB型？」

「A型」

「えー！意外だわ！」

「E型だけにですね。ナイスリアクション！」

「さすが兄さん！」

「そんなつもりなかったわ！」

親指を立ててグットサインを出した私たちを鳴海さんがつつこむ。

鳴海さんはよくしゃべる人だ。

多分生まれるときに、長谷川の方も鳴海さんが持って行ってしまったのではないかというほどによくしゃべる。

そのかわり長谷川はボケに専念(?)していた。

私からしてみれば、長谷川は私のピンポイントのボケによく気づくやつだと思う。

さすが私の元ストーカーだ。

そう考えるとストーカーに恋をしている私って、あのストックホルム症候群ってやつなんじゃないか？

いやいや。そんなことないさ。

「でもなんで血液型？」

「特に意味はないよ。なんとなく聞いてみただけ。でもA型には驚いた」

「俺も兄さんのリアクションに驚いた」

「だまらっしやい」

「私、よくB型と間違われるんだけど」

「でもわかるもん。B型っぽいもん」

「そんなにかなあ？」

「自分のことは意外と気づかないもんだよ。ね、隆夫？」

「何が？」

「こっちの話」

首を傾げる長谷川に笑顔の鳴海さん。

ここでオムライス登場。

私のはホワイトソースとデミグラスソースの二色のソースがかかったオムライス。

鳴海さんのはデミグラスソースたっぷりのオムライス。

そして長谷川のは・・・なんだこれ？天津飯？

「長谷川・・・天津飯頼んだの？」

「!？」

「ちよっ！吉野ちゃん！ゲホゲホ」

驚いてこちらを見る長谷川と、一口目を食べた時に変なところに入ったのか、猛烈に咳き込む鳴海さん。

だって長谷川が頼んだのってどう見ても天津飯だもん。

あんかけっぽいやつの上に、若干半熟気味の卵がかかったオムライスってどう見ても天津飯じゃん。

「この揚げなすとあんかけオムライスは美味しいんだぞ」

「天津飯じゃなかったんだ」

「一見ミスマッチと思うけどいざ食べてみるとあんかけが和風で天津飯にかかっているあれとは全然違うしこの揚げなすがうまい」

無表情＋一息で言い切ると、オムライスを口へと運び、パクリと一口。

モグモグモグと咀嚼しながら頷き、ゴクリと飲み込む。

そして言う。

「目覚めよ。バツカス」

「食べる前に言えよ」

長いポケでもちゃんと突っ込むのを忘れない。
さすが私。うん。ツッコミの才能あるのかもしれないな。マンガと
アニメとゲームネタに限るけど。

「ゲホゲホゲホゲホ」

鳴海さんはまだむせていた。

長谷川が背中をさすった。

ストックホルム症候群（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回は小ネタが多いです。

全部わかるかな？

次回もお楽しみに！

UFO キャットチャー

どう考えてもおかしい。

今日の長谷川はテンションが高すぎる。

何か良いことがあったのだろうか？

いつもの長谷川からは想像できないほど楽しそうだ。

「長谷川？なんか良いことあったの？」

「ん？別にいつもと同じだが？」

「いやいや、全然違うでしょ」

いくら無表情だからといってもテンションが高いのは声質でわかるつてもんだ。

オムライスを食べた私たちはゲーセンに来ていた。

明子曰く「あそこは私たちのお金を巻き上げて楽しんでいるところなんだ！」とのこと。

欲しかったフィギュアが（おそらく）定価の倍近くの値段をかけてもUFOキャットチャーで取れなかった時に言っていたから、きつと相当悔しかったんだと思う。

私はあんまりフィギュア<漫画なのでUFOキャットチャーの中に好きな作品のやつがあれば300円ぐらいやる程度だ。

そして鳴海さんが現在UFOキャットチャーで例のゲームのでかいぬいぐるみのゲットに励んでいる。

「くそっ！俺にもキャプチャが使えれば！」

あのグルグルするやつか。

UFOキャチャーの前でなんか騒いでいる鳴海さんを、少し離れたところから見ている私と長谷川。
なぜかいつの間にかここまで離れてしまった。

鳴海さんには悪いけど、あれだけ騒いでいる人とは他人と思われたい。

また失敗したみたいだ。

隣の長谷川を見る。

直前までのテンションを感じさせないような無表情だった。
私の視線に気づいたのかこちらを向いた長谷川と目が合う。
そのまま目を見る。

「何か用か？」

「長谷川ってゲーセン好きなの？」

テンションが高いのはきつとゲーセンが好きなんだと思った。
ここに来てからすごい落ち着きがなくなったもん。
今だって手に財布持ってるし。

「たしかに好きだが・・・なんでわかった？」

「そりゃ長谷川を見てたら誰でも気づくよ。なんか好きなのやってきたら？」

「でも兄さんを見ておかないと」

「あんたは保護者か。なら鳴海さんは私が見ておくから。これでいいでしょ？」

「吉野・・・お前いいやつだな！行ってくる！」

今頃かよ。

信じられないスピードで去っていく長谷川。

なんか長谷川って見た目によらず子どもっぽいなあ。

あれで愛嬌があれば完璧モテるんだろうなあ。
でもあの性格を知っているのは私だけって思うとなんか嬉しかった。

「あれ？隆夫は？」

「なんか好きなやつしに行っただよ」

「えー！せつかく俺が離れてたのに！」

「鳴海さんめちゃうくちや集中してたじゃん」

「まあね。あのぬいぐるみは手ごわかった」

かいていない汗を拭う仕草をする鳴海さん。
しかし手には何も持っていない。

「もしかして取れなかつたんですか？」

「ギクリ。ま、まあ相手のほうが一枚上手だったってことで」

「なんなら私取るうか？」

「得意なの？」

「まあね」

よく明子にも頼られてる。

さっきまで鳴海さんがやっていた機械の前に立つ。

鳴海さんから仕事料の300円を受け取り、一枚だけ投入。

「えーつと・・・こんなもんかな？・・・よつと・・・」

後ろから鳴海さんの熱い視線を受けながら、慎重にアームを動かしていく。

UFOキャッチャーにはいくつポイントがある。

まずはアームの開き具合。

これを把握するのとしらないのではかなり差が出てくる。

そしてボタン。

UFOキャッチャーには横に動くボタンと奥に動くボタンが付いているが、時々？の下に降りている途中で止めることができるボタンがある機械もある。

私はあれがあるやつが得意だ。
最後に方法。

最近のUFOキャッチャーはただ景品を掴んで持ち上げるだけではなくて、一本の棒に引っかかっている景品のフックを外す形式のものも増えてきている。

後者のは明らかに100円だけだと取りづらいし、『ぬいぐるみの紐がひっかかったー!』というようなラッキーが通用しないので、根気とお金とミスをしない精神が重要なものだ。

今回の鳴海さんがえんやこらしていたのはまさに後者の形式だった。でもここまで落ちそうなら多分200円ぐらいで落ちると踏んでいた。

一回目でもうかるうじてひっかかっているとこまでずらせたのでトドメを刺すために200円目を投入。

「おお・・・すげえ・・・」

鳴海さんの声が聞こえる。

私はボタンを慎重に操作する。

ウィーン。ガタンッ!

ゲットだぜ!

意外とあっさり取れてしまったためか鳴海さんは驚いている。

店員さんに袋をもらってその中に入れる。

実際に持つとやっぱり重いな。

「はいどーぞ」

鳴海さんの前まで行き袋を渡す。

「ありがとう・・・ホントにありがとう!」
「ちよつとキモイです!」

長谷川と鳴海さんの違いはこの気持ち悪さにあった。
鳴海さんは感情を制御できない人だった。

「いやー!超嬉しいわ!ありがとう!」
「どういたしまして。そういえば長谷川遅いね」
「隆夫ならたぶん・・・ほらいた」

すしきヨロキヨロして探したらすぐに見つかった。
これが双子特有の『互いの居場所がわかる』ってやつなのか?
二人で長谷川のもとに向かうと、謎のギャラリーが出来ていた。

UFO キャッチャー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書きちゃってもいいですよ？

かなりラブコメ要素が強くなってきました。

この二人（今は三人ですが）はどうなるのでしょうか？

実は今作もキャラクターたちがあいかわらず大暴走しております。

一番困っているのは僕ですが、みなさんは笑いながら見てやってください。

では次回もお楽しみに！

謎のギャラリー

私と鳴海さんが長谷川のもとに向かったとき、長谷川の周りにはギャラリーができていた。

ギャラリーと言っても10人にも満たない人数ではあるが、ギャラリーはギャラリーだ。

ゲーセンでギャラリーができると言えば、あの踊りながら足でボタンを押していくゲームとか有名な格ゲーの人が来ていてその人見たさに腕を組んだ人たちが集まっているとかはよく聞く話だ。

でも長谷川がやっているのはこの距離から見てもわかるようにUFOキャッチャー。

ギャラリーができるほどのUFOキャッチャーってなんだ？

その答えは長谷川の足元にあった。

「何あれ？」

「隆夫はUFOキャッチャーが凄い得意なんだよねー」

のんきに鳴海さんは言っているが、あの量は半端ない。

機械の前に立つて真剣にプレイしている長谷川の足元には大量の袋があった。

1、2、3、4・・・5袋。

ここから見た感じだと5袋は見える。

私が鳴海さんの景品を1つ取っている間のわずか20分ぐらいの時間で5袋分も取ったの!？

きつとギャラリーというよりも野次馬ってほうが正しいのかな？

みんな袋を見てるし。

「おー隆夫。相変わらず大量だな」

「あ、兄さん。ちよっと待ってて」

そう言うとプレイに集中し始めた。

今はさつき私がやってたタイプのUFOキャッチャーで、景品はジョジョのスタンドのフィギュアだった。

しかも私の時よりはまだ取れそうにない。

長谷川は200円を一気に入れると、ポチポチを操作し始めた。

一回目は失敗したが、二回目であっさりとってしまった。

私の時とは違って『ずらしていく』のではなく『持ち上げてずらす』という感じだった。

正直なところ、どうやったのか全然わからなかったけど、ありのまま起こったことを言うぜ！

200円入れてなんか操作し始めたと思ったら、景品が自分から落ちていくようにずれていって落ちたんだ！！

って感想だ。

「やっぱり隆夫はすごいな！」

兄、感嘆。

「今のどうやったの？」

思わず質問する私。

「アームの力と景品の重さを計算して、そこからどこを狙えば一番効率よく落とせるかを導き出したらあとはボタンを正確に押してくださいだけだろ。そんなにすごいことか？」

「・・・あなたは天才か！？」

簡単そうに言っているが、常識的に考えてそんな計算してる時点で『俺頭イイ』発言だし、正確にボタン押すだけって簡単に言うけ

ど、それが難しいからみんな景品が取りにくいんだろ！
と心の中でつつこむ。

「まあ成績は悪くないぞ。毎回10位以内には入る」

「長谷川ってそんなに頭良かったの!？」

意外だ。

うちの高校は順位が廊下に貼り出されるようなことはないので、テスト後に受け取る細長い全教科の成績が書かれた紙でしか順位とかがわからない。

私は明子と比べるとかなり上位にいるし、前回の定期テストでも総合で15位に入って明子に自慢していた。

「じゃあ前回の定期は何位だった？」

「ああ。あれは1位だった」

「1位!？」

あれ?なんか15位で自慢していた自分が恥ずかしくなってきた。
1位で自慢しないとかどんだけ強靱な心を持つてるんだ。

「まあテストは自分の実力を調べるためのものだからな」

「そ、そうなんですか。今度からは長谷川先生と呼ばせていただきます」

「工場長と呼んでいたきたい」

「生産性の問題か？」

この頭の良さでこのオタク度って反則だよ。
天は才能を与える人材を間違えたらしい。

「隆夫。そろそろ満足した？」

くだらないやりとりをしていると鳴海さんが長谷川に声をかけた。どうやらUFOキャッチャーをしだすと、声をかけられるまではなかなか自分から帰らないらしい。なんとも変な性格。もし今度ゲーセンと一緒に来ることがあったら気をつけよう。

それ以前に一緒に来るような関係にならなきゃいけないのか。

「そうだな。そろそろ帰るか」

「私も帰ってケータイの設定とかいろいろしたいし」

「じゃあ帰ったらメールしてやれよ。隆夫」

「いや、アドレスとか知らないし」

「なんと!？」

「そんなに意外か？」

「だってお前。このご時世で友達と言えば最初にするのがアドレスの交換って常識だろ!？」

「どこの世界の常識だ」

「いやいや!隆夫の常識がズレてんじゃないのか?そんなんだから友達ができないんだよ」

「別にそこまでして友達が欲しいわけでもないからな」

長谷川ってやっぱり友達居ないんだ。

まあ少なくともいるとは思っていなかった。

「この機会に教えてもらえば?」

「でも吉野はまだケータイ買ったばかりだぞ?」

「そんなもん紙に書いて渡してやればいいんだよ。ほれ」

鳴海さんはそう言って手帳を差し出して、アドレスを長谷川に書かせる。

カキカキ。
書かせた手帳のページを破って私に渡す。いや、押し付けるように渡す。

「なんて強引な・・・」

「吉野ちゃんも吉野ちゃんだ。少しは行動しなさいな！とりあえず帰って設定終わったらメールしてね！」

じゃ！と言って歩き出す鳴海さん。

「なんか悪いな。兄さんは少し強引だから。気がむいたら送ってくれ」

「別に気にしてないよ。とりあえず設定が終わったら送るよ」

そうかと言って鳴海さんを追いかける長谷川。

顔は似てるのに中身は全然違うなあ。

そんなことを思いながら、思わず手に入れてしまった意中の相手のアドレスが書かれた紙を見た。

謎のギャラリー（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

次回もお楽しみに！

訪問者

翌日。

自分の部屋で長谷川からもらったアドレスが書かれた紙を見ていた。一応登録はしてみたものの、メールを送っていいものか少し迷っている。

用も無いのに送るのはいかがなものか？

長谷川は私のアドレスを知らないのに、こちらは知っている。

これは何もなくても送るべきなのか？

私がつむむと部屋の中で唸っていると、部屋のドアをノックする音が聞こえて一美が入ってきた。

「お姉ちゃん。ちょっといい？」

「ん？どうかした？」

あのツンデレな妹の一美が自ら私の部屋に入ってくるなんて珍しい。前に私が布団生活をしていたときに来たのだった、かなりレア度が高いことだった。

「あのね、実はご相談がありました・・・」

「相談？」

これはますますレア度が高いルートに迷い込んでしまったみたいだ。どっかでフラグ立てたっけ？

「うん。実は今・・・あ、誰にも言わないですよ？もちろん明子さんにも言ったらダメだからね？それで今、その、私、恋をしているわけですよ」

一美が恋かあ。

「へー。別にいいんじゃない？」

「ちよっと、まだ続きがあるんだってば。でね、その相手の人なんだけど、私より年上ってゆーか、お姉ちゃんと同じの歳の人なんだけど。あ、年上ってどう思う？・・・まあ年齢なんてあんまり気にしないよね。で、今年受験じゃん？聞いたところによると、なんか東京の大学に行くらしいんだよね」

わざわざ東京の大学に行くってかなり頭いい人だよな。

一瞬長谷川のことを頭に浮かんだ。

・・・まさか長谷川のことじゃないよね。

「で、そこでお姉ちゃんに相談なんだけど、私はどうしたらいいと思う？」

「どうしたらって・・・どうしたいの？」

「私はまだ中学生だから相手にされないってのはわかってるんだけど、それでも好きなもんは好きだし、とりあえずは気持ちを伝えるだけ伝えておきたいなあって思ってる」

「・・・なんの相談なの？」

「いや、ちよっと聞いてもらいたくて・・・」

なんでそこまで答えが出ているのに相談しにきたのかまったくもってわからない。

多分後押しして欲しかったんだろう。

顔まで真っ赤にしちゃって・・・可愛い妹である。

「もう自分の中で答えが出てるんだからそれでいいんじゃない？」

「でも失敗したら・・・」

「大丈夫だって。まだ若いんだし、失敗したって相手からどっかに

行っちゃうんだから大丈夫」

「・・・なにげに失敗すること前提じゃない？」

「成功するときのこと考えたって、どうせ嬉しくて頭真っ白になるんだからあんまり意味ないって」

「お姉ちゃんが変なこと言ってる。でも正論っぽくて気持ち悪い」

ちよつと正論言ったらこれだよ。

「でもなんかちよつと勇気でたよ。その、あ、ありがとね」

「・・・ついにデレたな」

「別にちよつと感謝しただけじゃん！もういいよ！じゃあね！」

ボタン！とドアを閉めて一美が出ていった。

久しぶりに一美のデレたところを見た気がする。

つてゆうか最初に部屋に入ってきた時点からデレデレだったのは内緒にしておいてやろう。

それにしても受験かあ。あんまり夢とかなないからなあ。

とりあえず近くの大学に行ってから考えようかなと思ってる。

そういえば長谷川つてどこの大学行くんだろ？

かなり頭が良いからそれなりに高いところ行くんだろつ。

ちよつと気になってきた。

「そつか。これ送ってみればいいんだ」

私はケータイを手にとってメールを打ち始めた。

ポチポチ。

『こんにちわ。吉野です。アドレス登録したから送ってみました。ところでどこの大学行くの？』

何回か文章を作り直して固すぎず柔らかすぎない絶妙の文章ができた。最初だから絵文字・顔文字・『w w w』は無し。よし。送信。

何気に緊張する。

一応好きな人にメールを送っているわけだから、返信が帰ってこなかったらどうしようとか考えてしまう。

そして数分後。

長谷川から返信が返ってきた。

『長谷川だお。大学とかまだ決めてないw wとりあえず自分で行ける中で一番高いところにも行ってみようかと思ってる)・・・
(・) v 吉野はどこに行くんだ?』

かなりオタク丸出しな文章だった。

長谷川相手に文章を考えていた私が馬鹿だった。

訪問者（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

今回は妹デレ回でした。

なんとなくデレさせたかっただけです。

後悔はしていない！

ということでも次回もお楽しみに！

メール

『オタク丸出しじゃんww私もまだ決めてないww大学ってどうやって選んだらいいの?』

もう何も気にしないで勢いだけで返信。

メールが返ってくる。

以下メールのやりとり。

『オタクだからなwwそれは俺も聞きたいところだ。とりあえず入って勉強とかについて行けないようなところは入らないほうがいいと思う』

『やっぱりそーゆーもんなのかな?』

『大学は勉強ばかりしてるやつは負け組だって鋼の腕と足をもつ身内が言ってた』

『普通に兄さんって言えwwまあなんかサークルとか色々あるみたいだしね』

『俺はあのリア充な集団に入れるとは思えないけどなww』

『はげどww』

そのあと何件か意味の無い内容のメールを繰り返して終了した。

それにしてもまさかいきなり『wwww』を使ってくるとは思わなかった。

なんか某掲示板とかも見てそうで怖いな。

今頃スレ立てされてたりして・・・ないな。

ブブブブブブブ。

机の上のケータイのバイブ機能がブブブブと音を立てた。

メールを見ると明子からだった。

アドレスの登録完了しましたメールだった。

明子はどこに行くんだろ？
思い立ったが吉日。

『明子はどこの大学に行くんでゲスか？ww』
『私は保育士の専門学校だわよー（・・）』

なんでも、ほとんど書類選考だけで合否がわかるから選んだらしい。
しかも結果が11月までにはわかるらしい。
ようは試験勉強が嫌なのね。

明子らしいや。

でも明子はもともと小さい子が好きだからむいてると思う。

『私は小さい子を内緒でオタクの英才教育してやるのだww』

この内容のメールがあったけど、さすがにこれは冗談だと思う。い
や、冗談だと思いたい。

そんなことをしたら日本終わるぞ？

とりあえず今日得た情報をまとめよう。

長谷川がランクが高い大学。

明子が専門学校。

さて私はどうしようか？

ホントなら長谷川と同じ大学に行きたい。正直一緒にいたいしね。

でも私が行ったところで勉強についていけるとは思えない。

だからと言って明子みたいに専門学校に入るくらいの目標があるわけ
ではない。

うむむむむ・・・

よし。とりあえずは残りの課題でもやるかな。

私は机に夏休みの課題を広げて取り掛かった。

実はもうほとんど終わっていて、このプリントともう2枚ぐらいで
終わりだった。

夏休み前の学校の授業中でほとんど終わらせておいて、夏休みは遊ぼう作戦だった。

でもよく考えたら私って明子以外に遊ぶような友達いないから、この作戦は初めから失敗することが決まっていたのだ。

私としたことがぬかった！

でもどうしてこんな時期に課題なんてあるのだろうか？

普通に受験勉強させてくれたらいいのに。

まあ勉強しないで遊んでる人もいるだろうけど、その人は受験で失敗してしまえばいいと思う。

そう考え始めたら勉強するのめんどくさくなってきた。

本でも読むか。

本と言っても、本棚には漫画とラノベしか並んでない。

私はラノベを読みたい気分だったので、どれにしようかと本棚の前に座って吟味……

あれ？このシリーズの3巻の下巻がない。

おかしいなあ……たしか内容は覚えてるから読んだはずなんだけど……

棚のほかのところを探しても見当たらない。

そこでふと思いついた。

そういえばこのシリーズってアニメ化したはずだから、それで見ただけど本は買ってないのかも。多分そうだ。

「どうしようかなー」

どうせ暇だし買いに行くか。

思い立ったが吉日。善は急げ。

私は着替えて出かける準備をした。

と言っても近くの本屋に行くだけだからかなり適当なコーディーナーだ。

外に出て愛車の『エクストリームサイクロン号』（名付け親は私）

にまたがってペダルを踏む。

『エクストリームサイクロン号』、通称『ムサイ号』（こっちの名付け親は明子）こと自転車は私の力で動いていく。

本屋に着いて中に入ると、クーラーが聞いていてとても涼しかった。うちの家にもクーラーが欲しい。

我が家は扇風機だけで生活している。

北海道民の大半がそうなのだが、夏場はクーラーではなく扇風機だけで過ごしている。

クーラーを持っている家庭は割とリッチな家と認定されることもしばしば。

まっすぐにラノベコーナーに向かう。

そして目的のシリーズの前に立って抜けていた巻を手取る。

ふと話し声が聞こえて隣の本棚を覗いてみた。

もちろん他のお客さんもいるわけだから話し声にしてもおかしくはないんだけど、私はなんとなく覗いてみたくなってこっそり覗いた。そこには仲良さげに話している明子と長谷川がいた。

メール（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

感想とか書いていただけるとトランザムできるかもしれません。

そろそろ話を動かしていきます。

次回もお楽しみに！

見てはいけないもの

私は驚きのあまり、そのまま何事もなかったかのようにレジで会計を済ませ、普通に家に帰って一息ついた。

頭の中はぐちゃぐちゃだったけど、からだはとても冷静だった。

あれ？なんか見てはいけないようなものを見た気がするぞ？

よし。冷静になって思い出してみよう。

まず本を買いに本屋に行った。

そこで欲しかった本を見つけて買った。

家に帰った。

終わり。

「あれ？終わっちゃった!？」

いやいやいやいや違う違う!!

えーとなんだっけ・・・いや、思い出せるんだけど思い出したくないような感じ。

えーと・・・思い出したくないなあ・・・

たしか本棚の影からそつと覗いたらたしか・・・

「あああああー！ー！ー！ー！！！！えっ!?!?なんで!?!?なん
でなの?!?あの二人つてできたの?私だけ知らなかったとか?
うわーなんか仲間外れにされてるしー・・・はあ」

はあ。

もしもホントに付き合ってたんだとしたらどうしょ。

でも明子には、私が長谷川に気があることはバレてるっぽいし、長谷川は長谷川で・・・

ん?私、長谷川のこと全然知らないな。

知ってることと言えば、ジヨジヨ好き・ゲーセンのプロ・成績優秀。このくらいだ。
なんで好きになったんだべ？

「って話が脱線してる！」

そつだ！今は私の長谷川に対する気持ちじゃない。

問題なのは明子と長谷川の関係についてだ。

長谷川の家からはあの本屋が一番近いから、あそこにいるのはわかるよ。

でも明子は？

明子の家ってあの本屋の最寄駅からJRの駅で4駅ぐらい離れてるんだよ？

わざわざこつちまで来る用事ってなんだ？

まさか本当にあの二人が付き合っているとしたら、全部つじつまがあう。

長谷川に会いにきた明子。

これから二人で夏休みの宿題を片付けるために長谷川の家で・・・

『照井。そんなこともわからないのか？』

『ちがうよ！長谷川くんの教え方がわかりにくいんだよ！』

『そんなことはない。俺は教科書よりはわかりやすく教えていると思ってる』

『これだから天才肌はいかんだよ』

『俺は天才なんかではない。普通に授業を受けていれば簡単に解けるはずだ』

『いいや違うね』

『そつだそつだ！隆夫は天才バカだ！』

『兄さんまで・・・』

『さすが鳴海さん！私の良き理解者！』

『フフフ。この長谷川鳴海の永遠の理解者としてそばにいさせてもよいぞ？』

『それはいくら兄さんでもだめだ！照井はおれの理解者なんだ！』

『二人とも私のために争わないでー！』

つてな感じになってたらどうしよう！

・・・これはないな。

でもなんで明子があの本屋にいたのかが謎だ。

誰か私に答えを教えてくださいー！

その時ケータイからオラオラオラオラー！と声が出た。

「ん？電話？」

私の着信音はオラオラの連打である。

ケータイを手に取り電話にでる。

「もしもし？」

『あ。もしもし？』

『どちら様ですか？』

『あ、オレオレ！オレだよオレ！あの高校の時から同級生の！』

「なんだ明子か」

まるつきり女声で『オレオレ！』って言われてもバレバレじゃん。

とても落ち着いていたけど、心臓はバクバクである。

なんせ噂の明子さんからの電話である。

「どうかしたの？」

『実は今長谷川くんというんだけど、良かったら君子も来る？』

「え！？なんで!？」

『いやあ、たまたま会っちゃってさあ』

ホントにたまたまなのか？

「どこの本屋？」

『君子の家の近くの本屋』

「何しに行ってたのよ」

『君子の家に行こうかと思ってたら、君子の妹ちゃんに勉強教えて
つて言われちゃってさ。そんで本屋によってから行こうと思つて、
よつたらよつたで今度は長谷川くんに会っちゃってさ。で、君子の
家だと妹ちゃんがアレだからこつちに来たほうが長谷川くと話し
やすいんじゃないかあと思つて』

「一美・・・あいつが原因か！」

『へ？原因？なんの話？』

「なんでもない！こつちの話！今から行く！マツハで行く！」

電話を切った私は一美の部屋にオラオラノック（高速連打ノックの
こと）をする。

コンコンコンコンコンコンコンコンコン！！！

「ちよつと何！うるさいうるさい！わかったからちよつと待つてて
！」

「いいや限界だ！開けるね！」

がちゃり！

開けてから気づいたけど、久しぶりに一美の部屋を見た気がする。
そこにはなんかこう・・・見てはいけないようなものがあつた。

「なんで吉良よしき・・・きゃーっ！！！！ホントに開けないでよ！」

「！」

「一美・・・あなた・・・」

「ちよつともう出てって！むしろこの家から出てって！」

「え？ホントここって一美の部屋・・・？」

「もつお姉ちゃんには関係ないでしょ！私の趣味をとやかく言わないでよ！出てって！」

強引に追い出されてしまった。

えーと。とりあえず明子の待つ本屋に行こう。

愛車のエクストリームサイクロン号にまたがり、半分くらいブーツとしたままペダルを踏みこむ。

ゆっくりと動き出す愛車に力をいれながら一美の部屋を思い出していた。

一美の部屋にあったもの。

それは部屋の中にある大きなコルクボードいっぱいには貼られていた、たくさんの明子の写真だった。

見てはいけないもの（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると踊り狂います。

ついに話が動き始めましたね！一美の！

次回もお楽しみに！

エクストリームサイクロン号

一日に本屋さんを自転車で2往復していることに気づいた私。これも全て姉である私になにも話さない妹が悪いと思う。

でもあの部屋を見た直後にこのセリフを本人の前で言えるかと言えば、答えは否だ。

それにしてもいつの間にも……いや、いつからあんなことに……。これはいわゆる『百合』というやつだろうか？

漫画や二次元の世界では馴染み深い言葉だけど、三次元であるこの世界ではあまり見かけない言葉だ。

花の名前は別だけどね。

そしてなんでまた明子に。

これは問い詰めるべきなのか？それとも姉として応援してあげるべきなのか？

うむむむむ。

唸りながらムサイ号を漕いでいると本屋の入口が見えてきた。

入口横にある駐輪所に愛車を止めた私は、店内に入り明子と長谷川を探す。

「あれ？いないぞ？」

店内は一階が書店、二階がレンタルコーナーとなっている。

きつと二階の方にいるのだろう。

そう思って二階に続く階段を登る。

登りきる直前で声が聞こえてきた。

「やっぱりこのシリーズのほうが面白いって！」

「照井はなにもわかってないな。こっちのシリーズのほうが微妙に現実味があって面白い」

「なんの話？」

二人を見つけた私は会話に混ざりつつ合流。

「お、君子。オハヨー。今ね、長谷川くんとこのアニメについて討論してたの」

「なんだ。照井が呼んだのか？」

「まあね。このあと君子の家に行くし」

「そうだったのか。おはよう、吉野」

「うん。おはよう。二人とも、もう夕方だけだね」

時刻は午後3時をすぎている。

「で、どのアニメ？」

「これ」

そうやって明子が指したのは、脳が電腦化された世界でなんやかんやする警察のお話だった。

明子が好きなのは2期目のほう。テロリストとそれを追う警察の話。

長谷川が好きなのは1期目のほうで、天才ハッカーと警察の話。ちなみに私は長谷川派。

それを伝えると、明子姫はご立腹のようだった。

「なんじゃそれは！後から来た人間に投票権なんぞないぞよ！」

「さすが吉野だ。見る目があるな」

同時に非難の声と称賛の声をいただいた。

光栄でもあり残念でもある。地味に複雑な気持ちだ。

「そついえばうち来るの？」

「まあ妹ちゃんに呼ばれちゃったしね」

「ふ、ふーん。じゃあ行こっか？」

家を出る前の出来事を思い出して少し怖くなった。

家に帰ったら明子はどうなってしまふのだろうか。

「そうか。なら俺も帰るかな。欲しいのも買ったし」

「へー。何買ったの？」

「ラノベの新刊。ホントは街中の専門店とかに行けばポイントとか特典とかついててお得なんだろうけど、そこに行くまでの電車賃だけで、本がもう一冊買えるからな。特典よりは量だ」

「へー。意外。長谷川って特典とか集めてるようなイメージだった」
「最初のころは集めるために、そーゆー店を回ったりもしたんだが、特典って地味に困るんだ。もらっても使い道がないしとっておいても捨てるのが勿体ないって思っちゃって捨てれなくてドンドンたまってくんだよな」

「あーわかるわ。最初はファイルとかに挟んでいくんだけど、だんだんファイリングするのがめんどくさくなってくるんだよね。早く本も読みたいし」

「はい！ちよっとストッパー！お二人さん。そろそろ行きませぬか？私も生徒が待つているんだが？」

盛り上がってきた長谷川との会話を断ち切るようにケータイの画面を見せてくる明子。

『明子さん。まだですか？一美、待ちくたびれますー』

うわー。なんかブリブリしてるー。

一美ってこんなメール送ってるの？

ちょっとイメージと違っわ。

「というわけで、続きは君子の家でしなさい」

「えっ!？」

口から心臓が出そうになった。いや、一瞬出て戻ったかもしれない。明子め。最初からこれが狙いだったのか・・・策士め。それでも心の中で喜んでいる自分が憎いぜ。

「行ってもいいのか？」

「は、長谷川がいいなら来れば？」

「なんでツンデレ？」

「そうか。ならお邪魔させてもらっかな。話すことも山ほどあるからな」

お前どんだけ溜め込んで生活してるんだよ！

もちろん声には出さずに心の中でつつこむ。

それだけ友達がいないってことなのだろう。

友達がいたとしても長谷川の会話についてこられる人種はあまりいないのかもしれない。

そう考えると、私ってオタクで良かった。

思わずニヤける。

「うわー。君子きもーい」

横で明子何か言っているが、どこ吹く風のごとく無視。

じゃあ行こっか、と言って二人を誘導するように店を出る。

私は駐輪所に止めてある愛車のエクストリームサイクロン号。

明子は電車なので徒歩。

長谷川も自転車。

「照井は歩きか。俺の後ろに乗るか？」

なんですと!？

長谷川の自転車の後ろには荷台がついていて(いわゆるママチャリ)、そこに二人乗りすることができる。

「えー。私重いしー」

「大丈夫。鍛えてないけど力はあると思う」

クネクネしながら言う明子と、それを明らかにツッコミ待ちのボケで返答する長谷川。

私はどうするべきなんだ？

? みんなで歩いて帰る。

? 長谷川の後ろに乗っている明子を羨ましく思いながら帰る。

? 「明子じゃなくて私を乗せて!」と言って変わってもらおう。

? 明子だけ歩いて帰ってもらう。

うわー。もしも私の脳が電腦化されていて、明子とテレパシーまがいのことが出来たとしたら、多分明子の手によって?にさせられると思うし、かと言って何もしなければおそらく?になることは間違いない。

どうする?どうする私!

あ。思いついた。

「明子。私のに乗りなよ」

そうだった私の後ろにも荷台付いてるんだった。もっと早く思い出していれば考えなくてもよかったのに。

「あら、そう?君子ちゃんに甘えちゃおうかしら?」

「でも前は明子に譲るけどね」

「殺生なー！」

「重いと思うんならなおさら痩せる」

そんなに明子自身のことは重いとは思えないけど、自己申告して
なら仕方ないな。

そんなこんなで正解は？の『明子が私を後ろに乗せてムサイ号で帰
る』でした。

エクストリームサイクロン号（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

すでにわかる人にしかわからないネタの応酬となっていることをお詫び申し上げます。
ですが次回のほうが酷いかも知れないことを先に謝っておきます。
ごめんなさい。

ということで次回もお楽しみに！

テレ期

現在。午後4時。

場所。吉野君子宅。

状況。長谷川と君子の部屋にて二人きり。私が勉強机の椅子、長谷川は前回同様クッキー型クッションの上に座り本棚を物色中。明子は一美の部屋。

感情。ものすごいドキドキ。

表情。ニヤつく顔を抑えるのに全力全開。

行動。椅子の上に座ったまま楽なポーズ。

うん。大丈夫だ。問題ない。

内面は大変なことになってるけど、いつも通りの私にしか見えないはずだ。

明子は明子で、あの一美の元へ何も知らずに行ったのだから心配ではある。

しかし今は自分のこと最優先だ。

それにしてもホントに来るなんて・・・

長谷川も女子高生の部屋にお邪魔するんだから、なんかちょっとは遠慮とかなんかそーゆーのをして欲しい。

でもそんな長谷川が良いわけであって。

・・・きゃー！私つてばなに言ってるんだろ！

頭の中で顔を押さえて悶える私。

そんなことばかり考えていて、ニヤける顔を長谷川には見せられな
いと思ひ、表情筋をフル稼働させている。

三次元でもモザイクとかつけれたらいいのに。

「そついえば知ってるか？」

「え、えっ！？何！？」

「・・・大丈夫か？」

急にノーモーションノールックで話しかけられたから声が裏返ってしまった。

長谷川のバカ。話しかけるなら話しかけるって言ってよ！

「大丈夫だ！問題ない！」

「いい装備は出せないけどな。それでだ。この漫画が来年の春にアニメ化するって知ってたか？」

「アニメ化？もうするの？」

長谷川が見せてきた漫画はまだ3巻までしか発行されていない漫画だ。

「らしいぞ」

「でも私アニメってそこまでチェックしてないからわかんないなあ」

「俺も知らなかったんだが、たまたまネットで見かけてな」

「ネットか・・・」

一応この部屋にもノートパソコンがある。

もちろんニコニコできる動画サイトかアニメを見るぐらいである。

公式サイトとかブログとかも何も見ないからパソコンさんがかわいそうと思う日もある。

だがそれも仕方ない。

だって見たいものがないんだもん。

「それはそうと吉野さん」

「なんですか長谷川さん」

「ひとつお願いがあるんですが」

「お願い？」

急に改まってお願いって・・・
もしかしていくら二人きりだからってエッチなお願いとかは

「この本貸してもらえませんか？」
「・・・で、ですよー」

長谷川に限ってそんなことするわけないよねー。
私の脳みそが腐ってやがる。

「やっぱりダメか？」
「いやいや全然いいけど、どれ？」
「これだ」

長谷川が本棚から一冊抜き取ったのは少女漫画だった。
でもまだ3巻までしか出ていない。

「それがいいの？まだ巻数も出てないんだし買えばいいのに」
「いやその・・・しいじゃ・・・」
「え？なんだって？」

横を向いて急に小声になる長谷川。
何言ってるのかわからないので、椅子から立ち上がって身を乗り出す。

「だからその・・・恥ずかしいじゃないか」
「は？」
「この歳にもなって少女漫画をレジに持っていくとか恥ずかしいだ
る？」

「だろ？って聞かれても、私は女だし恥ずかしいなんて思ったこと

もないからわからないし。それに店員さんとかだっけ気にしないと思っよ?」

「いや、それは分かっているんだが・・・」

何この生き物。

超可愛いんですけど。

無表情なくせに微妙に赤くなって恥ずかしがってるし。うわー頭撫でてー。

「吉野?」

「長谷川・・・可愛いな」

「・・・は?」

やばい!つい口に出しちゃった!

これどうしたらいいんだ!?

「吉野・・・可愛いってどういうことだ?」

「いや、その、頭の中で考えていたことが口に出てしまったといっかなんというか・・・」

「もしかして吉野・・・俺のこと・・・」

嘘っ?そーゆー展開!?

まだ早いつて!

「俺のことBLのネタにしてるのか?」

「いや、実は・・・えっ!?!いやいや!してないよ!そんなことしてないよ!」

「なんだよその慌て方は。絶対にしてただろ」

「してないつてば!私BLとか興味ないし!」

「本当か?なら信じるけど」

うはービックリした。

二重の意味でビックリしたわ。

顔が熱くなったので両手で顔を仰ぐ。

まさかそんなこと考えていたとは。

でもなんかもつたいないことしたなあ。

「それにしても吉野はBLとかは読まないんだな」

「一応知識とかはあるけどそんなに興味が無いかな。もしかしてまだ疑ってるの？」

「吉野を信じるよ。女のオタクっていったら半分以上がBL好きのような気がしてたんだ。だから吉野もなのかなと思ってな」

「じゃあ長谷川は興味あるの？」

「勘弁してくれ。兄さんみたいに年の近い兄弟がいると抵抗がありすぎてダメだ。しかも双子だとなおさらだな」

もし長谷川と鳴海さんなら鳴海×長谷川かな？

でも鳴海さんは誘い受けとかもできそう。

長谷川は無表情で落ち着いてるから攻め？

でもさっきのあの恥ずかしがってるところを見ちゃったから受けにしか見えなくなってきた。

「吉野。今考えてたことを全部話してみろ」

「げ。マジですか？」

「俺は怒らないから話してご覧」

すごい満面の笑顔（演技）でこちらを見てくる長谷川。

椅子から降りて正座をする私。

大人しく全部吐いて楽になるう。

デレ期（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

さてさて長谷川をデレさせてみました

次回は一美のターンです。

次回もお楽しみに！

Q & A

正座で長谷川と鳴海さんの関係を恥ずかしく語らされた。
なんで私がこんな目に・・・
長谷川が振った話じゃんかよー。

「吉野が俺と兄さんのことをそういつぶうに見ていたなんて少し心外だな」

「もとはといえば長谷川から聞いてきた話じゃんか」

「それとこれとは全くの別問題だ」

「ずるいー」

「じゃあお礼に吉野の質問にもひとつだけ答えてやるよ」

なんでも答えてくれるのか。

何聞こうかなあ。好きな女の子のタイプとか聞こうかなあ。

でももしも私と全然違うタイプの子が好き、とか言われたら耐えられないからやめておこう。

うーん。聞きたいことはたくさんあるけど・・・

「なんか三つぐらいに増えないの？」

「そ、そんなに聞きたいことがあるのか？」

少し驚いた様子の長谷川。

そりゃもちろん好きな人のことなら沢山知りたいと思うのは自然の摂理だ！なんて言う度胸はないので、

「長谷川のこと全然知らないからね」

と軽くごまかしてみる。

「そんなことないと思うぞ。俺は結構吉野に話してると思う。逆に何を知ってる?」

「長谷川隆夫。高校3年生。成績優秀。オタク。ジヨジヨラー。双子の兄の鳴海さんがいる。ゲーセン大好き。以上」

「それ以外で他に何か聞きたいことあるのか?」

何か問題でも?と言う感じで聞いてくる長谷川。

「いやいやあるでしょうよ。例えば好きな食べ物とか」

「リゾット」

「好きな季節とか」

「秋」

「嫌いな物とか」

「暑苦しい人」

「・・・好きな動物」

「犬とたぬき」

質問(?)に対して速攻で返してくる長谷川。

これは負けられない。

ここまで来たら長谷川が止まるまで質問攻めにしてやる。

「好きな筆記用具は?」

「ボールペン」

「好きな国は?」

「日本」

「好きな外国映画は?」

「TAXIシリーズ」

「好きな日本の場所は?」

「我が北海道」

「好きな男のキャラは？」

「インテリメガネ」

「じゃあ好きな女のキャラは？」

「黒髪ロングの委員長タイプ」

「好きなタイプは？」

「炎タイプ」

「いや、そうじゃなくて・・・」

なんでポケモン。

ネタが思いつかなかったから、さりげなく聞いてみたらすごい返さ
れ方をした。

「なんだ終わりか？じゃあ今度はこっちのターンだな」

「ちよつとまだエンド宣言してないし！」

「アニメだとスルーは基本だぜ！俺のターン！」

まさかの攻守交代！

落ち着く時間をください！！

「好きな食べ物は？」

「えつと、いちご」

「好きな季節は？」

「あー、春かな」

「好きなキセルは？」

「キセル！？えーつと・・・チエーンキセル！」

「嫌いな食べ物は？」

「ドロドロになるまで煮込んだ鍋焼きうどん」

「好きな動物の森のキャラは？」

「やったことないからわかんないしー！」

「動物の森のキャラは？」

「えーつと・・・ため吉だっけ？あの店員」

「よく知ってるな。じゃあ好きな男キャラは？」

「DIO様」

「嫌いな男キャラは？」

「体育会系の先輩」

「好きな男のタイプは？」

「優しくて話の合う人」

「好きな女のキャラは？」

「明るく元気なキャラ」

「嫌いな女のキャラは？」

「いじめっこ」

「よし。わかった」

ふう。前半は変則的過ぎたわ。

後半はスムーズに答えられた気・・・が・・・す、る・・・。
あれ？もしかして私やられた？

「吉野の好きなタイプは優しくて話の合う人か」

「ちよつと、それはあくまでタイプの話であって・・・」

「いやいや。この耳で確かに聞きましたから」

「いや、ちよつと、その・・・」

なんて答えたらいいんだ？

あの無表情の長谷川が、ここまで口元をニヤつかせてるのなんて初めて見たわ。

それでもここまで言うておいて『長谷川は好きじゃない』とは言えないし、かと言って長谷川に別の好きな人がいたら困るし・・・
うわー。マジでどうしょ。

「じゃあ攻守交代で、次は吉野の番だ。でもラストターンだから質

問は一つだけな」

なにそれ。

もしかして狙ってたとか？

いやいや、長谷川がそんなことを考えるはずがないよ。

だって私のことなんてただの気の合うオタク友達としか思っていないはずだもん。

でもこの展開は・・・

ええい！ままよ！どうにでもなれ！

「は、長谷川のす、好きなタイプは？」

「ほっとけなくてオタクで話の合う人」

あーやつぱり。

「じゃあ俺のターンだな。俺のこと好きだろ？」

落ち着いた声で質問してきた長谷川を見つめる。

ずっと無表情で居てくれたら助かるのに、こっぴつときだけ微妙に微笑みが入るのさ。

その顔にやられたんだからちよつとは自覚して欲しい。

「質問には3秒以内で答えてください。好きですか？」

「うん」

なんでこいつはいつも上から目線なんだ。

もう・・・それでも好きだから仕方ないな。

「俺も吉野が好きだ」

その言葉を聞いて少し嬉しくなった。

出会いこそよくわからなかったけど、今こうしてまた告白されているわけだ。

あの頃と気持ちは全然違うけど、長谷川と出会えてとても良かったと思う。

Q&A (後書き)

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変喜びます。

もうだめですね。

キャラ達が相変わらずの大暴走。

ついに告白しちゃいました。

ソウテイガイドス。

まだ続きますので次回もお楽しみに！

本音

「好きって・・・ホント？」

「こんなところで嘘ついてどうするんだ」

「だよね・・・」

こんなにあっさりでいいのだろうか？

私はそう思った。

少しだけ、ほんの少しだけ正樹のことを思い出した。

正樹の時もなんかこんな感じだった。

流れと勢いで付き合ったからあんなことになってしまったのかもしれない。

今回はどうなんだろう？

どうしてもあの時と比べてしまう。

本当に心から人を信じれないのは、やっぱり正樹との出来事が原因なのかもしれない。

正直、人と付き合うのが怖い。

でも長谷川なら大丈夫・・・？

よくわからない。

時々、心の中で無意識に自問自答している自分がいる。

いつも答えは『わからない』だ。

でも長谷川なら・・・と考える。

私の中では長谷川は特別なのだ。

単に話が合うからとか長谷川が優しいからとかではない。

私は長谷川の雰囲気が好きなのかもしれない。

きっと居心地がいいのかもしれない。

もしかしたら私が思っている以上に長谷川は変な奴かもしれないけど、それでもいいのかもしれない。

『かもしれない』は裏を返せば『わからない』と一緒に思ってい

る。

本心では信じたいけど、心の奥では疑っているのかもしれない。なんか考えれば考えるほどよくわからなくなってきた。

つまり、長谷川の言葉を信じていいのかわからないということだ。

「もしかして不安なのか？」

なんで長谷川は私の考えていることが分かってしまうのだろうか？
長谷川のこういうあざといところも好きなところだ。

「そう見える？」

「何回も言うようで悪いが、吉野は辛かったり不安な時は隠すタイプじゃないか？そこが心配なんだ」

「まあ・・・もしかしてそれって同情してくれて好きって言ったの？」

なんでこんなことを言ってしまうんだろう？

さっきまであんなに嬉しかったのに、急に怖くなってきた。

「最初は同情だったかもしれない。でもだんだんと吉野が不安な顔をしていると俺まで悲しくなってくるんだ。逆に、吉野の笑顔が見れたときは俺も嬉しい気持ちになる。つまりなにが言いたいのかって言うと・・・吉野には常に笑っていて欲しいんだ」

やっぱり長谷川は優しいと思う。

ホントに心配してくれてる。

それに比べて私は・・・。

「ありがとう。私もこんなに心配してくれてる長谷川のこと好き。でもなんかうまく受け止められてない」

「どづいつことだ？」

長谷川にはホントのことを話そう。

今決めた。

心配してくれている長谷川のためにも素直になろうと思った。

それで好きじゃなくなるなら仕方ないと思う。

「実は正樹のことがあってから、少しだけ人間不信になってるんだ。誰も信じられないってゆーか・・・あ、でも長谷川と明子は別だよ？」

長谷川は何も言わずに、クッションの上にあぐらをかいていつもの無表情で聞いている。

「そしてさつき長谷川に好きって言ったら、長谷川も私のこと好きって言うてくれたじゃん。嬉しかった。でもそれをホントに信じていいのかわからない自分がいるんだ」

だんだん自分がクサイセリフになってきていて、こんなキャラじゃないよなーとか思った。

それでも静かに聞いてくれている。

「でね。多分正樹のことがあったから少し怖いんだと思う。なんていうか恋愛に臆病になってるってやつ？人間不信の延長みたいなもんだと思う。だから長谷川のことは好きだし、大好きだけど、そーゆー関係になるのが怖いんだと思う」

全部言い切った。

長谷川の反応を待つ。

これが私の気持ちです、と言わんばかりの熱弁だった。

我ながら熱く語ったと思った。

「吉野」

長谷川がゆつくりと口を開いた。

「俺は人を好きになつたのは初めてだ。だからこれが恋愛感情なのかそれとも同情心からなのかは、正直わからない。でも俺は吉野が好きだ。さつきも言ったが笑顔で居て欲しい。できることなら俺のことを信じて欲しい。俺に対しては正直であつて欲しい。俺は吉野といると楽しい。こんな気持ちは初めてだ。それだけだとダメなのか？もつとちゃんとした理由が必要なのか？」

なんか心臓をズカン！と撃ち抜かれたようだった。

長谷川の素直でまつすぐな想いが私の心に響いた。

そうだ。そんなに難しいもんじゃない。

素直に簡単に考えてみたら意外と答えはあっさり出た。

「私・・・長谷川が好き。大好き。もつと楽しいことしたい。一緒に話したい」

「俺も吉野といろんなことがしたい。俺も吉野のこと大好きだよ」

長谷川の柔らかい笑みを見ると、嬉しくてすこし泣きそうになつた。でも泣き顔を見せるのはなんだか恥ずかしかったので必死でこらえた。

こんなにも互いの気持ちが通じ合うことが嬉しいことだとは思わなかった。

正樹のときとは全然違う気持ちだった。

「でも俺はシャイで恥ずかしがり屋だからうまく笑えないんだ」

「雰囲気ぶち壊すなよ！長谷川はそのままの笑顔で十分だよ」

「そう言ってもらえると助かる。じゃあこれからもよろしくな。吉野」

そう言って手を差しのべる長谷川。

「握手なの？ここは引き寄せて抱きしめてくれるんじゃないの？」

「ほら。シャイだから」

「そこは頑張れよー」

呆れて笑いがこみ上げてきた。

長谷川の握手に応じると長谷川も少し笑う。

顔を上げて長谷川を見ると目が合っ、顔が少し赤くなったのがわかった。

「な、なんで笑うのさ。握手を求めてきたのは長谷川でしょ」

「やっぱり吉野には笑顔が似合うよ」

だからその顔は反則だっば。

本音（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
感想とか書いていただけると大変感謝感激します。

またここで一段落しました。
いい感じですね。

純粹な長谷川に惚れそうでした。

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7054y/>

遠距離女としつこい男

2011年12月11日13時47分発行